

『阿弥陀寺町の幽霊』

逢坂かのを

若い女性が真っ暗な海の底に沈んで行く。

老女の霊が身を挺して必死で止めようとしたが、無情にも彼女の身体は老女の霊をすり抜けていく。

ブラックホールのように深い闇の底に吸い込まれて行く。

もはやなす術も無く老女の霊は必死で彼女の身体に入り込んだ。  
やがて彼女の身体から蛍の様な鈍くうつろな灯りが抜けていった。

生まれて初めて幽霊に会った。足がちやんとあった。怖くなかった。美人だった。

1999年 山口県下関市阿弥陀寺町

海峡に沿って走る国道に面した小さな一軒

家。五坪程の庭に2DKの朽ちかけた木造住宅。庭には雑草が生い茂り玄関の壁には蔦が絡みつき屋根まで伸びている。家の中には家具や冷蔵庫などの生活用品がそのまま残っていて先住者の生活がうかがえる。知人が、市の中心に位置する物件にしては格安だと、投機目的で買った家を借り受けた。

私の名は川本拓海三十四歳、福岡のテレビ局で12年間ディレクターとして番組を作ってきた。プロデューサーに昇格の話が来た時何故か躊躇して、気がつくときと辞表を出していた。何故と聞かれても明確な理由はない、あえて言えば視聴率の呪縛に少し疲れたということかもしれない。とにかくテレビ局を辞めて去年この町に帰って来たのである。

それから半年の間のんびりど実家で過ごしたが、そろそろ何かをしなくてはと思っていたところ、この家に遭遇した。まだ何をするかはつきりしてないが、窓から海峡を望むこの家が気に入って事務所として借りるこ

とにした。  
木を切り草を抜き根を掘り起こし蔦を剥ぎ取るのに一週間かかった。庭に山と積んだ草木と家の中の家具や電化製品の廃棄を業者に依頼したところ、軽トラック四台分の量だった。畳を替え壁を塗り、机やテーブルを入れ込むと、何とか事務所らしくなった。  
玄関を入ってすぐ右の六畳間の窓を開けると、庭に残した楓の木の先に船の行きかう海峡と対岸の町並み、その先に連なる山並みと、まるで壁に掛けた大きな額縁の絵画を見ているような錯覚にとらわれる。  
窓から吹き込む潮風と揺れる楓の枝がその景色は実物だと教えてくれる。  
梅雨を控えて天井の滲みが気になるので屋根に上ってみた。セメント瓦がずれた箇所が二箇所ありそこから雨水が入り込むようだ。瓦が割れて抜け落ちる恐怖と戦いながらもなんとかズレを修正した。  
一息ついて屋根の上から眺める海峡の景色は

格別だ。行きかう船を眺めながら煙草を一服  
している、どこからか三味線の音が流れて  
きた。右隣は水産会社の倉庫でほとんど人が  
居ることはないし、左隣はタクシー会社のビ  
ルで音楽など流すことはない。  
耳を澄ましてみると遠くからではなく、どう  
も三味線の生音である。梯子を降りてみると  
家の中から聞こえてくる。閉じたはずの玄関  
ドアが開いている。覗いてみると女性もの  
白い草履が目に入って来た。奥の部屋からた  
どたどしくも切なく物悲しい三味線の音が流  
れてくる。何故か大きく深呼吸をして忍び足  
で奥の部屋まで行ってみた。柱に隠れて覗き  
込むと若い秀麗な女性が椅子に腰掛けて三味  
線を弾いている。萌黄色の地に朽葉色と辰砂  
の赤い大小の線がランダムに配置された模様  
の呂の着物を粹に着流して、気だるげに三味  
線を弾く姿は、僕の好きな夢路の美人画を彷彿  
とさせる。見慣れぬ景色と音色にしばし呆  
然と立ち尽くした。組んだ足元から覗く長襦

袴の朱色が妙に生々しい。思わずゴクリと唾を飲み込んで恐る恐る声をかけた。

「こんにちは。」

自分の家に知らない人が居るのに「こんにちは」は無いと思うのだが、適切な言葉が浮かばなかった。

「こんにちは。」

彼女は驚きもせず笑顔で答えた。

「あとう、どちら様でしょうか。」

「あら、ここの家の方ですの。」

「はいそうですが、あなたは・・・」

「うふふ、勝手に上がり込んでごめんなさいね。私以前この家に住んでいましたの。」

「ああ、じゃあ東京に嫁いでいかれた・・・」

そういえばこの家を借りてすぐに、隣のタクシー会社の人に聞いたことを思い出した。

前の家主は五年前に病気で入院してしばらくして亡くなった。八十歳過ぎのおばあさんで

娘が一人いたが早くに東京へ嫁いで行きずつと一人暮らしだったそうだ。元芸者さんらし

くこの家で三味線を教えていたらしい。  
「そうよくご存知で、恥ずかしい話ですが先  
月離婚してこちらに戻って来ましたの。今  
友人の家に居候しています。勝手に上がり  
込んじゃってごめんなさい。」  
「いえそれは構いませんが、貴女も三味線を  
弾かれるんですか。」  
「・・・ええ、母が弾いていたものですから  
見よう見まねの門前の小僧です。これ母の  
形見なの。」  
そう言って弾いていた三味線を掲げて見せた  
。「先日この前を通りかかったら家がそのまま  
残っているので懐かしくなって、今日三味  
線を抱えて来て見ました。」  
「そうでしたか、よかったらいつでも遊びに  
来てください。事務所として借りたんです  
が、当分仕事はしませんというより何をす  
るかまだ決まっていらないんです。」  
別に美人の彼女に下心でそう言ったわけでは  
ない。テレビ局では女子アナやレポーター、

モデルなどの若い女性との接触が多かった。中には好みの女性や心惹かれた女性もいたが少しでもそういう感情があると仕事がやりにくくなる。また身近に女性問題で職場を去って行った人を多々見てきたせいもあってそういう感情をオフにする習慣が身についていた。でも彼女麻子は今まで惹かれた女性とは違っただ、何か不思議な魅力というか磁力があった。「ありがとう、申し遅れましたが私、丸山麻子です。よろしく。」

「あつ僕、川本拓海です。」

それから麻子は度々やって来た。ほぼ午後から来るが、たまに自分より先に来ていることがある。楓の下で折りたたみ椅子に腰掛けて海を眺めている。そんな時は市場やスーパーで買い物をしてきて、昼ごはんを作ってくれる。料理の手際がよく味も良いのだが、鰯の開きやカレイの煮付け、野菜の煮付けに味噌汁、漬物など純和風の年寄り好みの献立である。一度も洋風料理が出たことはない。

来ても何をするでもなく、持ち帰るのが面倒だと置きっぱなしの三味線を時折爪弾くぐらいである。ほとんど窓の側の椅子に腰掛けて海を眺めている。たまに二言三言交わす程度である。今日も二時過ぎにやって来て海を眺めていた。BGMがわりにつけているFMラジオの三時の時報が鳴ると「おやつにしましよう。」と言って紅茶を淹れてくれた。近くの和菓子屋で買ってきたというわらび餅を食べながら午後のティータイムである。天気予報では今日日中の気温は三十度位になると言っていたので、現在の外の気温はおそらくそれ位だろう。しかし、窓を全開した室内は海からの風が吹きぬけて汗をかくこともなく快適である。麻子の髪が風になびいて届く爽やかなシャンプーの香りが心地よい。こんな時ふと脳裏に結婚の二文字が浮かぶ。

「ここはやっぱり落ち着くわね。」

「麻子さんここで育ったんでしょ。」



「そうよここで生まれたの、阿弥陀寺町1の  
12」

「そうなんですか、でも何で阿弥陀寺町て言  
うんですかね、阿弥陀寺ていうお寺は無い  
ですよ。」

「私もよくは知らないんだけど、この先の赤  
間神宮、昔はお寺だったて聞いたことがあ  
るわ、阿弥陀寺ていうお寺だったんじゃない  
かしら。」

「へえそうなんですか。そう言えば歴史の授  
業で廃仏毀釈ってあった様な記憶がありま  
すね。」

「それよりこの海峡一日に約700隻の船が  
行き交うってご存知？」

「へーそんなに通るんですか。」  
「私も知らなかったんだけど、ラジオで聞い  
て驚いちゃった。今度数えてみようかな。」

「そうか、夜も行き来してるんだ。数えると  
したら二十四時間夜中も起きてなきやなら  
ないですね。」

「そうねえ、．．．そうだ二人で交代で数えればいいのよ。」

「そうですけど、ひよっとして二人って僕と麻子さんですか。」

「そんなの当たり前でしょ、他に誰がいるのよ。」

「ですよね。」

「ねえ、本当に数えてみない？二人とも今無職だし、やろうよ。」

麻子がここに来るようになって一ヶ月余り、歳が一回りは上であろう僕を友達扱いである。どちらが家主か分からない、いつも麻子のペースで押し切られてしまいがことのほか不満に思うこともない。

結局麻子が半ば強引に決めて三日後の金曜日に船の計測をすることになった。

次の日事務所にやって来ると、すでに麻子が来ていた。庭に転がっている石を集めている。

「麻子さん何やっていますんですか。」

「この庭殺風景だから花壇でも作ろうと思っ  
たの。」

「へえ、若い割りには気が利きますね。」

「歳は関係ないわよ、センスの問題よ。勝手に庭をいじって悪かったかしら。」

「そんなことないですけど、意外だなと思っ  
て。」

「だったらボーとしてないで手伝ってよ。」

またしても麻子のリードで花壇造りが始まっ  
た。大き目の石で囲いを作り、固い土を掘り  
起こしていった。水をしっかりと撒くように言  
われたので、如雨露に水を汲んで戻って来る  
と、麻子の姿がない。昼ごはんの買い物に行  
ったのかもしれない。たっぷり水を撒いてか  
ら土に混じっている石ころを取り除いている  
と、麻子が帰って来た。

「急に消えてしまっただこに行っていたんで  
すか」

「石ころ取り除いているの、気が利くじゃな  
いエライ、エライ。」

「やめてください、子供じゃないんだから。」  
「それよりこれ見て、可愛いでしょ。」  
そう言って麻子はコンビニの袋の中から、ふ  
つくらした棒状の葉にピンクの花をつけた2  
0センチ位の植物を取り出した。  
「買ってきたんですか。」  
「とんでもない、ちよつと先に駐車場がある  
でしょ、その横の土手にたくさん咲いてい  
るの。」  
「それ土手じゃなくその上の花壇に咲いてい  
たやつでしょ。」  
「よく知っているじゃない、たくさん咲いて  
るから少しくらい平気よ。」  
「近所なんだから僕が疑われるじゃないです  
か。」  
麻子は聞こえないふりをして、その花を花壇  
に植えはじめた。花壇は楓の木を囲むように  
丸く出来上がった。麻子が植えたピンクの花  
が六株と前から生えていた破れ傘を植えた。  
花が根付くか心配だ。枯れると麻子は僕の世

話が悪いと言うに違いない。  
一時間ちよつとの作業が終わり事務所に入つて時計を見ると正午を過ぎていた。  
「麻子さん昼ごはんどうしますか、弁当でも買ってきましようか。」  
「お腹あまり空いてないけど、拓海君少し我慢出来る。」  
「僕もそんなに空いているわけじゃないけど、なんですか。」  
「ちよつと対岸に行ってみない。」  
「対岸って門司港ですか。」  
「そうよ、唐戸から連絡船で五分で着くわ。」  
「別に予定はないし、行ってみますか。」  
「そうこなくっちゃ。」  
それからすぐに二人は唐戸の渡船場に向かった。事務所から歩いて十分程の距離である。渡船乗り場に着くとすぐに船が到着した。たった五分の船旅だが、デッキからの眺めはまるで旅してる様な錯覚に誘われ爽快である。遠く事務所の庭の楓の木がマッチ棒の大きさ

で見える。左手に見える関門橋がまるでゴールデンプリッジのように思える。

北九州市 門司港レトロ地区

門司港はJR門司港駅を始めとして明治、

大正、昭和初期の建物が多く残っている。そのノスタルジックなたたずまいを売りに観光に力を入れていたのでかなりの観光客を集めている。今日も大勢の人々で賑わっていた。渡船を降りると二人はすぐ前にあるカフェに入った。麻子はアイスティー、僕はオムライスを注文した。

「拓海君の好きそうなお店ね。来たことあるの。」

「いえ初めてです。知り合いから話には聞いていました。」

店内の壁いっぱいになつかしいハウロウの看板が飾ってある。レジのまわりや棚の上にも駄菓子やブリキの玩具が所狭しと並んでいる。

「懐かしい物がたくさんあるわね、今ブームらしいけどかなり高価なんでしょ。拓海君の事務所にも玩具がたくさん飾っているけど。」

「そうですね、ブームに乗って物によってはかなりの値段がついています。僕はそんなに高価なものを持ってないですよ。」

すぐにアイステイラーが来たが麻子は口をつけない。僕のオムライスが来るのを待っているのか。

「麻子さん僕を待たなくてお先にどうぞ。」

「待っている訳じゃないから気にしないで。」

そう言いながらも俺が食べ始めるまで口をつけなかつた。それからたいした会話もなく四十分ほどでその店を出ると、海の側の土産物店が並んでいる建物へ行った。一通り店を回ってから、麻子の希望でオルゴール館に入った。かなり年代物の豪華で仕掛けの大掛かりなものから手回しの小さな物まで、それは見ごたえのあるオルゴールのコレクションであ

る。館内は西洋の香りで満ちている。麻子は熱心に一つ一つ説明書を読みながら鑑賞している。と、一人の女性が麻子の側に来て声を掛けた。麻子と同年代に見える。

「陽子さんじゃない久しぶり、今どうしてるの。」

麻子はキョトンとしている。

「あら忘れちゃったの、大学で同じゼミだった高橋です。」

「ああ高橋さん・・・」

「卒業以来ね。確か福岡のテレビ局に入ったのよね。」

「・・・ええ、そうよ。」

高橋と名乗った女性は懐かしそうに話し掛けるが、麻子は目が泳いで落ち着かない風である。高橋と名乗る女性は陽子さんと呼んだ、どういうことだろう、僕は啞然とした。すると今度は男性がやって来て高橋さんに話し掛けた。

「ゆかり、車回したから急いでくれよ。」



「分かったわ、主人です。こちら大学で一緒  
だった川上陽子さん。じゃあ陽子さんまた  
会いましょうね。」  
男性は愛想笑いで頭を下げるとそそくさと去  
って行った。  
「知り合いですか、でも麻子さんのこと川上  
陽子さんて呼んでませんでした。」  
「知らない人よ、陽子さんて人と勘違いして  
るみたいね。」  
「でも麻子さん頷いてませんでしたか。」  
「私よく人と間違われるの、めんどくさいか  
ら適当に相槌打つよ。結構楽しいわよ。」  
あっけらかんと言う麻子に少しあきれたが、  
でもさつきは確かに動揺していた。今も目が  
泳いでるように見えるが・・・。狐につまま  
れた様な心地で釈然としないながらもオルゴ  
ール館を出て再び雑貨屋や土産物屋を見て回  
り、人気のミルク濃厚ソフトクリームを買っ  
た。岸壁のベンチに並んで腰掛けてソフトク  
リームを舐めている二人は、傍から見ればど

ういう風に映るだろうか。まさか親子には見えないと思うが。

「私、男の人とこんな風にゆったりと過ごすなんて初めてよ。若返ったみたい。」

「若返ったみたいって、まだ若いじゃないですか。それに別れたご主人とは恋愛結婚じゃなかったんですか。」

「そうねまだ若いわね。主人とは終わった事思い出したくもないわ。」

「すみません、いやなこと思い出させて。」

麻子は結婚生活の話は一切しないし、話がそれに触れると途端に不機嫌になる。きっと余程つらいことがあったんだろうと思った。

それから二人は人力車に乗ったり、遊覧船に乗ったりまるで観光旅行に来たカップルのように楽しんだ。広場でやっていた猿回しを見た時の麻子は、子供のように無邪気に笑い転げていた。

時間はあっという間に過ぎた。辺りにはうつすらと夜の帳が降り始めている。帰りの渡船

乗場に向かう二人は自然に手をつないでいた。

下関市 阿弥陀寺町

六月十五日金曜日午前十時に僕は事務所に  
来た。麻子が気まぐれで決めた海峡を往来す  
る船の数を計測する日である。正午から始め  
る約束なので次の日の正午までの四食分の食  
材を買出しに行くつもりである。麻子が食事  
は作ると言ったが、いつもご馳走になってい  
るお返しがしたいと頼んだら、意外にあっさ  
りと承知してくれた。玄関の鍵は掛けずに買  
い物に出掛けた。一時間ちよつとで戻って来  
たが麻子はまだ来ていなかった。  
スタートと同時に食べるつもりで昼食の準備  
にかかった。麻子がいつも和食なので洋食で  
メニューを揃えた。今日はスパゲティ・ミ  
ートソースである。麺が茹で上がり野菜サラ  
ダに取り掛かった時麻子がやって来た。

「もう食事の用意しているの、ゆっくりで良

かったのに、それよかビール飲も、よく冷えているわよ。」

「昼間から飲むんですか。」

「飲むったってビールよ、ドイツじゃあ子供も飲んでるわ。スタートの乾杯よ。」

そう言うのと持って来た白いビニール袋から六本パックの缶ビールを取り出した。

「泡盛も買ってきたから、久米島の古酒よ、拓海君泡盛好きだと言ってたでしょ。」

「麻子さんが酒飲みとは知らなかったな。」  
「飲むなんてもんじやないわよ、ウワバミつ

て呼ばれていたわ。」

「とても若い女性の台詞じゃないですね。麻子さんいくつなんですか。」

「あなたデリカシーないわね、女性に歳聞くんもんじゃないわよ。別に隠すこともないけど二十五よ、若くもないわ。」

「やっぱり僕と十歳も違うのか。」

「拓海君そんな歳なの、じゃあ三十五歳、意外と若く見えるわね。三十歳位かと思って

た。」

「まだ三十四ですよ、馬鹿ですから若く見えるんですよ。」

「何拗ねてるの、子供みたい。」

「ええ、子供の脳しかないもんで、麻子さん二十五歳なら・お母さんすごく高齢出産だったんですね。」

「・・・そう、そんな事どうでもいいじゃない、ほらビール飲も、もうすぐスタート時間よ。」

僕は何か腑に落ちなかった。隣のタクシー会社の人の話では、麻子のお母さんは八十歳位で亡くなったと言っていた。麻子が今二十五歳なら五十歳後半で生んだ計算になる。そんな歳でも産めるのか、三十過ぎの初産は大変だと聞いた事がある。なのにその倍の歳で・  
・男の僕にはよく分からない。  
「拓海君なにぶつぶつ言っているの十二時になつたわよ、このノートに正の字付けて数えていくのよ。」

どうでもいい事で悩んでも仕方が無いと思い直して昼食作りに戻った。特製のデミグラスソースと合挽きミンチをあえたミートソースの香りに麻子が反応した。

「良い匂い、あまりお腹空いてないんだけどこの匂いお腹の虫を刺激するわね。」

「出来ましたよ食べますか、そちらに持っていきますが。」

「そうね数えながら頂きましょうか。」

窓の側に小さな丸テーブルと椅子を二脚並べている。麻子はその椅子に腰掛けて行き交う船のカウントをしている。丸テーブルの上には僕の愛用のソ連海軍製のかい双眼鏡とノートに3Bの鉛筆、そして缶ビール。麻子がそれらの道具を窓枠によけて、運んできたスパゲティとサラダボールを置くスペースを確保した。それでも直径80センチ足らずの丸テーブルは皿がはみ出してしまふ。

「おいしい、いい味出てる。お嫁要らずね。」

「十年以上自炊していたんで、洗濯も掃除も

すべてやりますがやっぱり結婚はしたいですよ。」

「へーそうなの。それにしてもその歳で彼女いないなんて・・・もしかして同姓愛。」

「変なこと言わないで下さいよ。誤解されるじゃないですか。」

「誤解されるって、他に誰もいないじゃないの。」

「そうやって揚げ足取らないで下さいよ。言葉のあやっこっていうものですよ。」

「すぐむきになるところが可愛い。」

「またそうやって人をからかう、僕の方が麻子さんよりずっと年上なんですからね。」

「歳なんて関係ないわよ。拓海君業界人にしては考えが古いわね。」

「それよりちゃんと言ってるんですか、今もタンカーが通りましたよ。」

「あらそう、うっかりしてた。」

「麻子さんが言い出した事なんですから、ちやんとやっってくださいね。まだ始めたばかり

りなんですから。』  
こんな調子で海峡船舶運行数計測作業はスタートした。夜中の12時までには1時間交代、それから明け方までは仮眠を考えて3時間交代とした。  
今までこんなに意識して船を眺めたことがなかったもので、いろんな種類の船があることに驚いた。船体に大きくメーカー名をペイントした自動車運搬船、油を運ぶタンカー、随分大きな機械部品と思われるユニークな形状の金属を積んだ船、大きなクレーンの付いたサルベージ船、シャープな船体の高速フェリー、コンテナを山積みした船、カラフルな色とデザインの旗をなびかせた外国船、夜の海峡に浮かぶシャンデリアのような満艦飾の豪華客船など多種多様の船が行き交う。無理やり引き込まれた感じだったが気分が高揚して、今度は写真に撮りたいと思った。逆に言い出しつぺの麻子は夜になってもずっとお酒を飲んでいゝる。特殊な船を除いて全般的に灯りが少



ないのので小さな船は見落とす恐れがある。やり出すと手抜きの出来ない性格の僕は自分の番でもないのに、双眼鏡で海峡を覗きながら麻子のカウント記入を見張っている。

自分の番が終わると麻子は奥の部屋に行ってお酒を飲みながら三味線を爪弾いたり、CDプレイヤーで音楽を聴いている。

「麻子さん、そんなに飲んで大丈夫ですか、酔って寝てしまったら僕知りませんよ。計測中止しますよ。」

「何言ってるの、私はダ・イ・ジョ・ウ・ブリマせんよ。」

「ほら少しろれつが回ってない。」「大丈夫て言ってるでしょ、それよりあなたの番でしょ、ちゃんと数えなさいよ。」

「数えてますよ。僕は酔ってないんだから。」

「そう、じゃいいけど、最近この辺りの夜は淋しいわね。人っ子一人通りやしない。」

「前からそうですよ。」

「何言ってるの、私の若い頃は料亭がたくさんあって夜は賑わったものよ。」  
酔いのせいか麻子の口調が少しおかしい。それだけではない意味不明な事を言う。

「私は売れっ子じゃったの、一晩にお座敷を何件もこなしてね。昔はこの先に二軒も検番があつたんよ。」

「検番・・・」  
麻子の言う事が理解できない。しゃべり方もまるつきり違う。僕は狐につままれたように啞然としてカウントも忘れて聞きいった。

「あたしやねえ三味線だけじゃのうて唄も踊りも得意だったの。もうモテモテじゃったんじやけえ、阿弥陀寺小町なんて言われてから。本当にあの頃は賑やかじゃった。でも海底トンネルが出来て、皆この町を素通りするようになった。その為かどうか分からんけどどんどんお店が閉まっていったんよ。芸者じゃ食べていけんごとなったんよ。如才のある娘はパトロンからスナック

やバーを出してもろうたけど、あたしや男に頼りとうなかった。魚市場で働きながら三味線を教えて何とか子供を育てた。ほいじゃけど高校卒業して一年もたたんうちに結婚して東京へ行ってしもうた。」

僕は何がなんだか訳が分からない。啞然とするばかりである。

麻子がまったくの別人になってしまった。酔いの所為だけとは思えない異常な雰囲気である。もしかして二重人格だろうか。

「薄情な娘よ。あたしが死んだらすぐにこの家を売ってしもうた。女手ひとつで苦労して建てた家を。」

「死んだ・麻子さん何言ってるんですか、そうとう悪酔いしてますよ。」

「心配せんでええ、悪酔いなんかしちよらせん。まあちよつとは酔うちよるかもしらんけど。」

僕は麻子のあまりの変わりようと理解困難な話の内容に驚き、自分も酔っている様な錯覚

に陥った。

「拓海君、あんたはええ人じゃ、こんなやさしい男に初めて会った。」

「そんな、まだ知り会っていくらも経ってないのに、買被りですよ。」

「いいや前から知っちゃる。」

「・・・。」

麻子の身体が雨に霞んだ街灯のような淡い灯りで包まれていく。その灯りが麻子の頭上から帯状に伸びて行く。そして今度は僕の身体全体を覆ってしまった。必死でもがいたが金縛りにあったように身体はピクリとも動かない。麻子の言葉がトンネルの中の様に反響している。次第に意識が遠のいていった。

1930年 北九州市田川

丸山麻子は炭鉱で栄えた九州は田川の出身である。八人兄弟の下から三番目四女として生まれた。長男は戦死、長女は生まれて半年

で病死した。次男は中学を出て地元やくぎの  
使い走りをしていたが揉め事を起こし、東京  
へ逃げると家を出たまま行方知れずである。  
次女、富十七歳は小倉の料亭で下働きをして  
家計を助けている。三女百合十五歳は小さい  
時に小児麻痺にかかり身体と言葉が不自由で  
寝たり起きたりである。四女麻子十三歳、三  
男三郎十一歳、五女咲九歳は共に小学生であ  
る。父親は炭鉱夫をしていたが一年前坑内で  
落盤事故に合い大怪我を負った。半年の入院  
を経て怪我は回復したが働く気力を失くして  
しまい炭鉱を辞め一日中家に籠りつきりで酒  
ばかり飲んでいいる。会社からの見舞金とわず  
かな退職金もすぐに底をついてしまい家計は  
火の車である。おまけに会社を辞めた以上炭  
住をすぐにでも出なければならぬ。次女富  
の仕送りと母親がボタ山で拾ってくる石炭屑  
を売ってのわずかな収入では食べるのにも窮  
する状態である。

小倉で芸妓娼妓の紹介人をやっている遠縁の

原田という男が、丸山家の困窮を見かねて話を  
を持って来た。姉妹で一番器量のいい麻子を  
長崎の花街丸山の桜花楼に預けたらどうかと  
いうのである。原田が出入りしている店の中  
でも一番の本店で習い事、躰もきちんとやっ  
てくれるという。仕込みっ子として自分が上  
手く交渉してやるという。母親はそんなこと  
ろに娘はやらんと反対したが、父親が勝手に  
話を決めてしまった。この春小学校を卒業す  
る麻子は勉強が好きで、上の学校に行きたか  
ったが家にそんな余裕など無い事は十分に承  
知していた。家族思いの麻子は自分が長崎に  
行けばみんなの暮らしが楽になるならと承知  
した。むろんそこがどんな所か麻子には知る  
由もない。二週間後に原田は千円の金を持っ  
て来た。十年年季ということでは話がついたと  
言う。麻子の卒業式の次の日に迎えに来ると  
言って帰って行った。

過ぎて欲しくない時間は思いとは裏腹に早く  
過ぎて行く。母は嫁いで来た時に持って来た

久留米緋の着物を夜なべして仕立て直し麻子に着せた。よそ行き用にと大事にしていた母の唯一の財産である。別れの時母は目に涙を一杯にためて麻子の胸元に、あまりの緋でこさえたお守り袋を差し入れた。

「こん中にはわしがボタ山で見つけた仏さんが入っとる。お前を守ってくれる。」

そうやって麻子を抱きしめたが後は嗚咽で言葉にならなかつた。

こうして麻子は卒業式の次の日、原田に連れられて長崎へ旅立った。

長崎市丸山遊郭

桜花楼の玄関口に立った麻子はりっぱな門構えに圧倒された。玄関だけで麻子が住んでいた炭住の一軒分の広さがある。玄関前の御影石の石畳には打ち水がしてあり左右に塩を山盛りしてある。

「何しとる、こっちこんかそこはお客さんの

玄関や。」

原田は玄関を見つめてポーツと突っ立っている。麻子を手招きした。玄関の石畳の右手前にある植え込みの横に勝手口へ誘う丸い飛び石が続いている。麻子は原田の後について勝手口を入って行った。女中らしい割烹着姿の女に原田は名前を告げた。女は承知していたらしく笑顔で頷くと小走りで奥に行った。暫くして小柄な五十がらみの男が出て来た。痩せぎすで異様にえらの張った男は薄くなった頭の真ん中を、ポマードをべったり塗ったサイドの毛で器用に覆っている。ポマードの薬品臭が麻子の鼻を刺激して思わずくしゃみが出そうになったが、ぐっと唾を飲み込んで堪えた。「番頭さん丸山麻子です。なかなかの器量でしよ。」

原田が手もみをしながら猫なで声で言った。番頭と呼ばれた男はそれに答えず、麻子を下から上まで舐めるように見ている。



「まあまあやな、ばってん貸金弾んだ分しつかり働いてもらわんとな。おーい民さん。」奥に向かって大声で叫ぶと、藍色の銘仙の着物を着た麻子の母親位の歳の女が息を切らしてやって来た。片付けでもしていたのか着物の裾を端折って帯にはさけている。赤い腰巻が異様にまぶしい。

「ああ原田さん、この娘かね。十三にしちやあ背が低かね。」

「ええ、今から伸びますけえ、なかなか賢い娘じゃけえあんじよう躡ちやって下さい。」

こうして麻子の丸山花街での新しい生活が始まった。

家に渡された千円の貸金に利息・紹介料・交通費・それに仕込みっ子として習い事に通わせてくれるとしたらその授業料などが加算されて二千円を越す借財を背負うことになる。この世界から抜け出すには早く芸妓になって借金を返すしかない。店としては娼妓にすればすぐ金になるが、条例で十五歳未満の接客

は堅く禁じられている。麻子はまだ十三歳なので後二年は接客できない。原田は親には芸妓（芸を売る）にすると言ったが店には芸妓・娼妓（遊女、春を売る）どちらでもまかせると言っている。

花街を商売にたとえ芸妓・娼妓を商品とすれば、置屋が製造、検番が問屋、御茶屋・待合が販売といえる。桜花楼は貸座敷・御茶屋に加えて置屋も兼ねているので仕込みっ子、舞妓、芸妓さらに禿（かむろ）、娼妓（花魁）をも抱えている。仕込みっ子をどうするかは店次第である。芸妓にするなら仕込みっ子から舞妓に、娼妓にするなら仕込みっ子から禿へと昇格する。女将と番頭が相談した結果麻子をどうするかはしばらく様子を見ることにした。麻子は無心に働いた。家ではボタ山に石炭拾いに出掛ける母に代わって炊事から掃除洗濯まですべての家事をやっていた。しかしこの仕事は何もかも始めての事でまごつき失敗の連続であった。毎日のように叱られるが、

根が明るく努力家の麻子は必死に頑張った。  
桜花楼に来て間もない頃、横須賀からの軍艦  
が長崎港に停泊して大勢の軍人が店にやって  
来た。大人数の上に慣れない客に店はてんで  
こ舞いの忙しさである。麻子はまかない用の  
飯炊きを言いつけられた。大量のご飯など炊  
いたことがないので途方に暮れた。皆忙しく  
誰にも聞くことが出来ない。仕方なく見よう  
見真似で炊きはしたが、案の定焦がしてしま  
った。こっぴどく叱られ一週間夕飯抜き、そ  
の上米代を借金に加算された。  
たっぷりと叱られた後、調理場の外にある井  
戸端で泣きながら焦がした大釜を洗っている  
と「クウ、クウ」と鳴き声が聞こえる。暗闇  
に目を凝らすと百日紅の木の下で何か動いて  
いる。近寄ってみると子犬がうずくまってい  
た。抱きかかえ井戸の側の調理場の窓からこ  
ぼれる明かりにかざして見ると、泥にまみれ  
て毛がチリチリになっている。井戸の水で洗  
ってやると、ブルブルツと体を震わせて水を

弾いた。その可愛らしい仕草に麻子は叱られた事も忘れて思わず「ウフフ」と声を出して笑ってしまった。手ぬぐいで拭いてやっている間もじっとしている。犬のくせに猫のようににザラついた舌で麻子の顔をペロペロ舐めまわす。

「お腹すいとるんやろ。」

ざるに盛った焦げ飯の中から白いご飯を選り、残った井戸端にあつた欠けた茶碗に盛り、残りの物の味噌汁をかけてやると、あつという間に平らげてしまった。麻子は自分のひもじさも忘れて嬉しくなった。

「麻子、何もたまたしとつとね早よう片付けて寝らんね。」

調理場から民代が怒鳴った。

「はい、直におえます。」

あわてて返事をする子犬を抱いて百日紅の下まで連れ戻した。ふたたび井戸端で片付け始めると「クウクウ」と子犬が寄ってきた。

「もうご飯は終いよ、見つかったら困るばっ

てんが早ようお行き。」  
それでも子犬は麻子の側を離れない。  
「あんたの面倒はみれんとよ。さあ早ようお  
行き。」  
後ろ髪を引かれながらも麻子は逃げるように  
調理場へ入って行った。  
それから麻子が井戸へ出ると必ず子犬はや  
って来た。店では子犬の話は聞かないので誰  
も気が付いていないらしい。麻子はヒヤヒヤ  
しながらも残飯を取っておいては子犬に与え  
てやった。どこで寝ているのか分からないが  
昼間に来ることはない。食べ終わると麻子の  
片づけが終わるまでじっと側に座っている。  
短い時間だが麻子には一番落ちつく時間であ  
る。洗い物をしながら小声で子犬に話しをす  
る時は空腹も辛い事も忘れている。子犬に  
咲という名前をつけた。可愛がっていた妹の  
名前である。  
こうして半年が経った。下働きの仕事にも慣  
れて失敗もほとんどしなくなつた。本来利口

な娘なので物覚えも早く、同じ仕込っ子の妙よりも重宝がられている。妙と麻子は同じ年だが桜花楼では妙が半年ほど先輩である。二人の躰係りの民代も麻子の物覚えのよさと、天性の明るさとどんなに叱られてもめげない強さに一目置いていいる。そんな折、民代は番頭に帳場に来るように言われた。帳場に入ると女将と番頭が卓袱台で向かい合っていた。「民代さんもここに座りませ、妙と麻子のことば相談しよう思うてな。」  
「どういうことですか。」  
「二人ともだいぶ店の仕事も慣れてきたばつてん、芸妓にするならそろそろ習い事させんといかん思うてな。」  
「うちはてつきり十五歳まで待つて客取らせると思うとりました。」  
「そら手っ取り早ようお金になるけどな、遊女のなり手はいくらでもおる、うちは芸妓が足りんのや。番頭さんはどげん思う。」  
「へい、聞くとところによると中国との雲行き

が益々怪しゆうなつて軍部の動きが活発になつとるらしいですわ。うちも最近軍の幹部や鉄工所の偉いさん達の座敷が増えとります。ばつてんもつと忙しゆうなりそうやから、芸妓が欲しいですな。」

「そげね、民代さん二人の習い事の段取りば頼んます。」

女将の素早い判断で来週から麻子と妙は三味線・舞・長唄・茶道の稽古を始めることになった。

下働きをしながら稽古場に通うので今までより数倍忙しくなったが、麻子は稽古場に行くのが楽しかった。どの師匠も大変厳しく、叱られてべそを搔く娘も多い中、麻子はつらいとはまったく思わなかった。稽古に打ち込むことでつらい境遇を吹き飛ばすかのように稽古に励んだ。

1933年

長崎市丸山桜華楼

あつという間の三年間だった。どの師匠も麻子の頑張りと才能に感心した。特に三味線の師匠は手放して麻子を褒め可愛がった。桜花楼の女将も鼻が高かった。将来丸山遊郭を代表する芸妓になるだろうと噂された。麻子が十六歳の誕生日を迎えてすぐに、桜花楼一番の芸妓豆華の妹分として舞妓のお披露目が華々しく行われ、麻子改め豆貞と命名された。一方不器用で稽古についていけなかった妙は一年で習い事を辞め禿になり、麻子より一年早い十五歳で花魁夢松としてお披露目を済ませていた。麻子改め豆貞は豆華の世話はあるものの今までより随分時間の余裕が持てるようになった。豆貞と夢松は話す時間も増え大の仲良しになった。二人でそれぞれの田舎の話をするのが一番の楽しみであった。仕込みっ子の時には二人で話す余裕などまったく言っていない程なかったのである。夢松の田舎は小倉で豆貞



の田川と近いという事もあって二人は更に親密になつていった。

1935年 長崎市丸山桜花楼

それから二年が経つたある晩、豆貞は夢松に呼ばれて井戸端に行った。夢松は何やらかがみ込んでいる。何をしているのかと近くに寄つてよく見ると犬をなでている。

「夢ちゃんその犬どげんしたん。」

「可愛いやろ、菊蔵さんの犬なんよ。」

菊蔵とは着物の手助けをする桜花楼専属の男衆である。豆貞もかがみ込んで犬の首筋をなでてやった。すると犬は豆貞の顔をぺろぺろと嘗め回した。痛いようなザラザラした感触にハツとした。

「咲、咲ちゃんや、心配しとったんよ。こげん大きいゆうなつてから・・・」

「何ね、サキつて。」

「うちがまだここに来て間もない頃、咲に慰

めてもろうたんよ。暫くして姿見せんようになつたばつてんが心配しとつたとよ。うれしいわあ、菊蔵さんの犬やったん。」

「あんまり大きい声出したらいけん、店ん人に見つかったら大事や。」

「ごめん、あんまりうれしゆうて・・・」

その時炊事場の方で人の気配がした。二人はビクツとして井戸の影に身を潜めた。

「夢ちゃん、俺や隠れんでもよか。」

「なんやあ、菊蔵さんねビククリしたわ。」

「誰かおっとね。」

「心配せんでよか、豆貞ちゃんたい。」

菊蔵は井戸の側までやって来て豆貞にコクリと頭を下げると、咲の首に巻いた紐を引っ張って裏木戸から帰って行った。

「あの子の名前はカピタンて言うんよ。咲やなか。」

夢松はちよつとツンとした言い方をした。

何故夢松が機嫌を損ねたのか豆貞は不思議だつた。

「カピタンておもしろい名前やね。」  
「菊蔵さんがオランダ人に貰ろたんやて。」  
夢松は得意げに話した。豆貞はその時の夢松の複雑な感情を察することは出来なかつた。それから三日後の明け方のことである。男衆の大声で豆貞は目を覚ました。屋敷の廊下を行き交う足音がバタバタと枕元に響く。寝ぼけ眼をこすりながら身体を起こしたと同時に襖が開いた。血相の変わった民代である。  
「豆貞、夢松から何か聞いとらんね。」  
「何ごとですか民代さん。」  
「夢松が逃げたとよ、お前知つとつたんやなかね。他のものはどげんね何か聞いとらんね。」  
「うち何も聞いとりません。」  
豆貞に続いて他の三人も口を揃えて答えた。この部屋には豆貞の他に三人の舞妓が寝ている。表の方でも騒がしい人々の叫び声が飛び交っている。  
「足抜けやー、足抜けやー」

「豆貞ほんまに何も知らんとやね、おうちは特に仲良かったばってん。」  
「ほんまに、うち知りません。」  
「ほうか、そんならよかばってん、おうちらこの部屋からいつとき出たらいけんよ。」  
そう言い放つと民代は小走りに出て行った。  
豆貞には事態がよく掴めなかった。ただ夢松が本当に逃げたのなら追っ手に捕まらないように願った。逃げとおせるように、母から貰ったお守りを握り締めて必死に祈った。  
夜が明けても屋敷はざわついていた。話では菊蔵が手引きして一緒に逃げたらしい。三日前の井戸端でのことが思い出された。あの時の夢松のただならぬ雰囲気が今やっど飲み込めた。と同時に犬の咲いやカピタンのことが気にかかった、カピタンも一緒に逃げたのだろうか、どこかに置いてきぼりにされていないか、二人のことが心配だがそれにも増してカピタンが気がかりだった。

1939年 長崎市丸山桜花楼

夢松が居なくなつて四年が過ぎた。日中戦争は日増しに激化していき男子は次々に徴兵されていった。そしてついに第二次世界大戦が勃発したのである。その影響が市民生活にも暗い影を落としていった。食糧不足が深刻になつてきたのである。燐寸、砂糖が切符制になり贅沢禁止令が施行された。それとは裏腹に桜花楼は番頭の予測どおり、軍部および軍需景気に沸く鉄工所幹部や軍事物資を扱う商人で繁盛した。豆貞は十八歳で芸妓になり四年が過ぎていた。桜花楼に来て十年目の来年で年季は明けるが、あと四、五年頑張りまゝとまったお金を貯めて田川に帰ろうと思つてゐる。そんなある日、女将のお使いで眼鏡橋近くの和菓子屋に舞妓の妹分桃華と出掛けた頼まれた和菓子を買った後、寺町の大音寺まで足を運んだ。

「姉さんお寺さんになんごとですか。」

「長いこと仏さんを拝んでなかけん、それにたまにはお母ちゃんに貰うた仏さんの里帰りばさせちやろう思うて。」

そう言うとお守り袋から黒い塊を取り出して賽銭箱の淵に乗せた。

「姉さんそれ何ですか、黒い石ころみたいばてんが。」

「これはな、うちが家を出る時お母ちゃんがくれた仏さんたい。よう見てみ可愛らしい顔しとつとやる。」

「うちにはただの石ころにしか見えません。」

黒光りするそれは石炭のかけらである。よく見ると成る程仏様に見えなくもない。豆貞は子供の仏様だと信じている。大好きな母のくれた大切なお守りである。この九年間ずっと豆貞の支えとなり守ってくれたのである。

豆貞が二十歳になってすぐに身受けの話が来た。浦上にある大きな製鉄所の支社長で年齢も三十八歳と地位のわりに若い帝大出の青年である。三年前に妻を亡くしている。豆貞を

正妻に迎えたいと言う。  
願ってもない玉の輿である。民代と豆華はこ  
んな良い話はないと諸手を上げて喜んだが、  
当の豆貞はその気はまったくない。女将に気  
持ちを伝えた。女将も今からまだまだ稼げる  
人気上昇中の豆貞を取られるのは算盤が合わ  
ないと考えていたので、快く了解してくれた。  
結婚など考えたこともないし、お金を貯めて  
田川に帰ることしか頭になかった。  
それから暫くして戦争特需に沸く丸山遊郭に  
もかげりが見え始めた。市民生活は戦争の激  
化と共に困窮の度合いを増していった。  
ある日の桜花楼の座敷、客の雑談でB29に  
よって北九州が空襲を受けたという話が耳に  
入って来た。豆貞は田川の家が心配にな  
り早く帰りたいたいという思いが募った。それか  
ら一切の無駄遣いをやめて貯金に励んだ。

1945年 長崎市

どうか家が一軒建つ位の貯金が出来た。  
豆貞は二十八歳を迎えていた。そろそろ女将  
さんに引退の話をしなればと思っっている。  
そんなある日グラバー邸近くに住む三味線の  
お師匠さんを訪問するため外出した。夏風邪  
をこじらせて臥せっていると聞いたのでお見  
舞いに行く為である。昼にはまだ大分間があ  
るというのに強い日差しが肌を突き刺す。  
日傘で顔を庇いながら道を急いだ。蝉の鳴き  
声暑さを一層つのらせる。見舞いを済ませ  
て師匠の家を出る時ふと壁の時計を見ると十  
一時五分前だった。しばらく足を進め角の洋  
館を曲がった途端犬の鳴き声が聞こえて来た。  
声のする洋館の庭先に目をやると一匹の犬が  
豆貞めがけて走って来る。豆貞は日傘を投げ  
出して側に来た犬を抱きしめた。犬は尻尾を  
盛んに振りながら豆貞の顔を舐め回す。  
「咲、カピタンね、あんた生きとったとね。」  
嬉しくて再びカピタンを抱きしめた時、長崎  
駅の方角で強い光が炸裂した。続いてドーン



という地響きのような音がしたと同時に入道雲の様なきのこ形の雲が湧き上がった。それが豆貞の目に焼き付いている長崎の最後の景色である。

1999年

下関市阿弥陀寺町

「ブウオーツ、ブウオーツ、ブウオーツ」

突然地響きのような汽笛が夜の静寂を突き破った。その音で目覚めた僕はテーブルにうつ伏せて寝ていた。重い身体を起こしたが状況がつかめない。頭の中では映画を見終わったばかりのように映像がフラッシュバックしている。夢を見ていたのだろうか、それにしては生々しい映像だった。筋書きもしっかり覚えていている。麻子さんが豆貞・・・酔った麻子さんの作り話を寝ぼけて聞いていたのだろうか。見回すと麻子は奥の部屋のサマーベッドで酔いつぶ

れて寝ている。テーブルの上は空になった泡盛の一升瓶と缶ビールの空き缶六本であふれている。僕は缶ビール一本と泡盛の水割りを二杯しか飲んだ記憶はない。それ位の量で酔いつぶれる事はない。やはり夢現で酔った麻子の作り話を聞いていたとしか考えられない。腹の虫が鳴って夕食を食べてないのを思い出した。お湯を沸かしてチキンラーメンを作り、窓辺のテーブルで暗い海を見ながら食べた。相変わらず船は行き交っている。少しづつ東の空が白んできた。ラーメンを食べ終え気分転換に散歩に出掛けることにした。麻子はぐっすりと死んだように寝ている。当分起きないだろう。前から気になっっているお稲荷さんに行ってみようと思う。海峡に沿った国道沿いのすぐ脇に赤い鳥居が立っていてかなり急な石段が続いている。まわりは木々に囲まれて傾斜が急なため国道から上の様子が分からない。車で通る度に気に掛かっていた。稲荷神社まで行って帰るのにそんなに時間は掛か

らない距離だ。  
普通に歩いて十分程で到着した。海側にはガードレールのついたメートル半ほどの歩道があるが、山側は崖から五十センチ位の幅に白線が引いてあるだけである。国道だけあって車の通行量はかなり多くスピードを出す車も多いので、海側の歩道を行き、入り口前の横断歩道を渡って行くのが安全である。反応の早い押しボタン信号が付いているので長い信号待ちで苛立つこともない。  
入り口は道路ぎりぎりに朱色の鳥居が建っていていきなり急な石段が始まる。ずっと長い階段が続くと思っていたが五十九段ほどで到着した。そこは猫の額ほどの狭いスペースで小さな祠が二つあるだけである。拓海は二つの祠に奉つてあるお狐さんを拝み、階段を三分の一下りたところにあるやや広い展望台と覚しき場所にあるベンチに腰掛けた。  
ここから眺める関門橋は意外と迫力がある。僕は良いスポットを見つけたとほくそ笑んだ。

後に分かった事だがこの神社のご神体は祠の中ではなく、向かい側の海にあるらしい。岸から海を覗くと注連縄を巻いた岩がある。それがご神体だそうだ。太陽が昇ってきて海面をキラキラと光のしずくが踊り始めた。あまりの心地よさについてウトとしてしまった。どれ位の時間が経っただろう、目を覚ますと照りつける太陽で額が汗ばんでいる。煙草に火をつけようとしてふと人の気配を感じた。首を振ると隣のベンチに誰か座っている。黄色のスパッツに虎の絵柄の黒のＴシャツ、幅広のレースの帽子に白いサンダル、それに赤いレンズのサングラスをかけた派手な人である。赤いパッケージから直接口で煙草をくわえた。外国製のラークのようだ。ひよっとして外人だろうか。目一杯吸い込みほっぺたを膨らませて大きく煙を吐き出すと、こちらを向いてニッコリと笑った。真っ赤な唇の隙間からキラリと金歯が輝いた。蛇に睨まれた

蛙のように僕は固まってしまった。

「お兄ちゃん地元のひと。」

「は、はいそうです。」

「この辺は良い所やね。この近所ね。」

「はい歩いて十五分ほどです。」

「話が遠いからこっち来んね。襲いやせんからハッハッハッハッハッ。」

金歯を輝かせながら豪快に笑った。僕は恐る恐る隣のベンチに移動した。側でよく見るとかなり年配のおばあさんである。

「ご旅行ですか。」

「小倉から来たんよ。ちよつと事情があつてね。」

「このお稲荷さんご存知なんですか、地元の人でも知ってる人少ないんですが。」

「たまたま通りかかっただけよ。歩き回って疲れて一休みしとったんよ。」

「そうですね、お手伝い出来るような事でしたら手伝いますが。」

「見ず知らずの年寄りに・・お兄ちゃんやさ

しい人やね。実は人を探してるんよ。」

「そうなんですか、まさかおひとりで。」

「お兄ちゃん信用出来そうやから話すけど、じつは私のひい孫なんよ。川上陽子といって年は二十五歳。急に居なくなってもうひと月が経つんよ。」

「川上陽子・・・何処かで聞いた覚えがあるような・・・」

「えっお兄ちゃん何処で聞いたんね。」

「うーん思い出さない・・・」

そう言う。「グーッ」とお腹の虫が鳴いた。

「お兄ちゃんお腹が空いとるとね。」

そう言うとお婆さんは腕時計を見た。

「もう昼過ぎやね、近くに食事出来る処ないね。」

「一番近いのは中華レストランですが。」

「中華か、ああ海の側にある店ね、さつき通ったわよ。じゃあそこに行きましょう。」

「ここでお兄ちゃんの名前教えてくれんね。」

「拓海、川本拓海です。」

「拓海君、食事しながら何処で聞いたか思  
出してくれんね。」  
「はあいいですけど僕財布も何も持って来  
ないです。」  
「手伝って貰うのに食事ぐらい奢るわよ。」  
そう言って立ち上がるとさっさと階段を下り  
て行った。年の割にしつかりとした足取りで  
ある。麻子の事が気がかりではあるが乗りか  
かった舟で仕方なくお婆さんの後を追った。  
レストランに入るとランチタイムともあって  
かなり込み合っていた。ちょうど一組の客が  
帰った海側のテーブルに腰掛けた。直ぐに店  
員が来てテーブルの上を片付けた。ランチタ  
イムはバイキング形式になっていた。  
僕は明け方即席ラーメンを食べたきりなので  
かなりの空腹だった。二枚の皿に山盛り  
に盛ってテーブルに戻ると、お婆さんは野菜サ  
ラダだけである。僕の皿を見て驚きの表情を  
したがちょっと微笑んで黙っていた。  
僕がものも言わずに黙々と食べている側でお

婆さんはサラダをゆっくりと二口三口食べた  
ただけである。箸を置いて海を見つめて考え  
込んでいる。僕の食事が終わると待っていた  
ように口を開いた。  
「川上陽子、何処で聞いたか思い出したね」  
「ちよつと待ってください最近耳にしたと思  
います。お婆さんの名前を教えて頂けませ  
んか。」  
「人に名前聞いといて私が名乗ってなかった  
わね、塩原妙と言います。」  
「ん、妙さんに川上陽子さん・・そうだ思  
い出した。昨晚聞いたばかりです。」  
「それほんとね、誰に聞いたんかね。」  
「聞きにくい事ですが、妙さん昔長崎の桜花  
楼に居ませんでした。」  
「えっ、何でそんな事知つとるとね。」  
「そこで丸山麻子さんと一緒に働いてました  
か。」  
妙は驚いて暫く口が利けなかった。コップを  
持ち上げて水を飲んでから「フーッ」と息を



吐いてから口を開いた。

「ビックリしたわ、拓海君誰に聞いたんね」

「僕もビックリです、昨晚丸山麻子さんに聞いたばかりです。」

「えっ、麻ちゃん生きとるとね。」

「生きてますが、歳が・・・」

「歳が何ね、麻ちゃんなら私と同じ歳たい。」

「ですよね、話を聞いた麻子さんは二十五歳なんですよ。」

「どういう事ね二十五歳と言えば陽子の齡やなかね。」

「そうですね、良かったら桜華楼で麻子さんに会った頃にさかのぼって話していただけませんか。」

「それはよかばってん長ごうなるよ。」

僕が頷くと妙は煙草に火を点けて深く一服してから話し始めた。

塩原妙は北九州の小倉で生まれた。実家は代々続いた呉服屋であるが、妙の父親の代になつて呉服屋に見切りをつけ新規事業に取り

組んだ。時代の流れに乗って事業は急速な勢いで伸びて行った。映画館を三館、ダンスホール二軒、キャバレー・バーなどの飲食店を七軒経営するサービス業である。社名も塩原呉服店から塩原興業へ変更した。一人娘の妙は贅沢放題で育てられた。大きな屋敷には乳母に二人のお手伝い、運転手が二人、庭師が一人、男衆が二人、計七人の雇い人がいた。父親は何人も妾をつくりほとんど家に帰らなかった。そのせいか、母親も芝居に映画にパーティーにと外出ばかりで、妙は乳母の梅に我がまま放題に育てられた。状況が一変したのは妙が小学校六年生になった年である。数年前地元のやくざの親分の勧めで父親が相場を始めた。親分の手引きにしたがって面白いように儲かった。気を良くした父親は親分を塩原興業の取締役に迎えて相場部門を設立した。それが畏だった。気が付いた時にはすべてを乗っ取られていた。屋敷も取られ無一文にな

つた父親は我が子である妙を身売りした。  
売られた先は長崎丸山町の桜花楼である。  
天国から地獄へ急激な生活の変化に桜花楼で  
妙は毎日泣き通した。おかげで毎日お仕置き  
された。妙が桜花楼に来て半年目に新しい仕  
込みっ子が入って来た。妙と同じ歳で同じ境  
遇の娘が来たことで幾分気持ちが落ち着いて  
きた。  
しかし、起きてから寝るまでびっしりと仕事  
があるので二人でゆっくり話す時間などほと  
んどなかった。妙は毎日逃げることばかり考  
えていた。  
完全にシंकろする。間違はなく麻子の話  
と同じである。これはいったいどういうこと  
なんだろうか。麻子が妙さんの話と同じ麻ち  
やんなら歳が合わない、今の妙さんと同じ歳  
のはずである。僕の借家の元の家主なら話が  
合う、そうか麻子は元の家主の名前なんだ。  
だとしたら事務所に来る麻子は誰なんだ。元  
家主の娘なら二十五歳なはずがない。だが娘

だと言っている。嘘をついているのか・・・  
何の目的で嘘をつくのか・・・謎である。  
麻子の話を聞いてすぐに妙さんに出会い再び  
同じ話を聞いている、偶然だろうか・・何と  
も不思議な出来事である。  
「拓海君、ちゃんと聞いとるとね、考え事ば  
しよる風やけど。」  
「済みません昨日聞いた話とまったく同じな  
もので頭の中で整理していました。」  
妙は話の腰を折られてちよつとムツとしたが  
僕が真剣に聞いているのが分かって再び話を  
始めた。  
乳母の梅に甘やかされて育った妙は下着の  
履き替えさえ自分でしたことがない。その所  
為もあって何をやっても不器用である。麻子  
と一緒に稽古事に通わされたが、どれをとつ  
ても思うように上達しない。どの師匠も匙を  
投げてしまった。妙を芸妓にするのは無理だ  
と悟った女将は稽古を辞めさせ花魁の世話を  
する禿にした。

妙が十五歳になると夢松という名で花魁のお披露目をして客を取らせた。性に合ったのか客の評判も良くすぐに人気者になった。自由な時間も出来るようになって落ち着いた日々を送るようになったが、逃げ出したい気持ちには続いていた。一人で実行するのは難しい、麻子を仲間にしようと思うが、時間があれば稽古に励み一流の芸妓になることに一途な姿を見るとなかなか言い出せなかった。悶々とした日々が続き早三年が過ぎたある日着付けの男衆を伴って浜町にある呉服屋に出掛けた。早く用事が済んだので二人で中島川沿いを散歩した。

二十四歳になる男衆は名を菊蔵という。まだ着付けの見習いである。たわいもない話をしながら川端を歩いていたが、突然菊蔵が夢松に想いを寄せている事を告白した。夢松も菊蔵のことが気に掛かっていたので悪い気はしなかった。しかしこの世界使用人同士の交際はご法度である。交際が発覚すればどんな目

に合わされるかshれない。分かつてはいても  
若い二人の想いは燃え盛っていった。  
店の者が寝静まった深夜、二人は裏庭にある  
納屋で逢瀬を重ねた。そして遂に夢松の念願  
である脱走を実行したのである。  
明け方早く菊蔵の手引きで店を抜け出し、グ  
ラバー邸近くのオランダ人の屋敷に逃げ込ん  
だ。菊蔵が着付けの傍ら下働きに行っている  
屋敷である。菊蔵が飼っている犬のカピタン  
はこの屋敷の主人に貰ったのである。  
二人は次の日の深夜まで匿ってもらった。深  
夜に屋敷を出ると海岸へ向かった。  
海岸には一隻の伝馬船が待っていた。菊蔵が  
漁師の従兄弟に頼んで用意したのである。  
すぐに長崎湾を出た船は陸沿いに北に進んで  
行った。船外機を積んだ船はかなりのスピー  
ドで闇を切り裂いて行く。平戸の瀬戸を抜け  
て明け方呼子の海岸に到着した。船を下りて  
陸路を三日かかって福岡に着いた。ひとまず  
姪浜の菊蔵の親戚の家に厄介になることにな

った。六十を過ぎた老夫婦の二人暮らしで漁業を営んでいる。母屋の脇にある網の繕い等に使用している道具小屋を借りることになった。菊蔵は仕事が見つかるまで漁を手伝って生活費に当てたがわずかばかりの収入では追いつかず、妙も近くの魚の加工場で働くようになった。桜花楼では、逃げる計画を立ててから妙は客のチップを貯めていた。たいした額ではないが二人で半年は食べていける。しかし、もしもの時の為に取っておかなければならない。菊蔵にも隠していた。貧しいながらも平穏な日々が続き二年目の二十歳で妙は娘を産んだ。妙は桜花楼で一緒だった麻子の勤勉さと逆境に負けない明るさを同じ歳ながら尊敬していた。その麻子の一字を貰って麻美と名付けた。それから三年が経ち不器用な妙もたいがいの魚がさばけるようになった。大漁の時は自分達の保存食として烏賊や鰯の干物を作っている。



たが、叔父の提案でその干物を販売するようになった。菊蔵一家が母屋の二階に引っ越して、今まで住んでいた道具小屋を干物の加工場に改装した。妙は勤めを辞めて干物加工に専念した。干物の評判は上々で家族だけでは生産が間に合わなくなり、近所の主婦を三人雇い入れた。その後も干物の注文は伸びていき、ついに近所に土地を買い加工場を新築した。妙のへそくりが役に立った。

菊蔵の故郷の山の名前をとって風師水産という会社を設立した。博多と小倉に販売店もオースンし商売は順調に伸びていった。

娘の麻美は十八歳で結婚して次の年に女の子を産んだ。初孫である。その孫が小学校に上がった年、菊蔵が癌で亡くなった。一周忌が済んで妙は会社を娘夫婦に任せて小倉へ移った。魚町にある販売店の二階を改装して住まいにしたのである。妙が十三歳で長崎に売られてから三十三年目の里帰りである。

両親の行方はまったく分からない、桜花楼で



は里心がつくというところで手紙など連絡をと  
ることを禁じられていた。気にならなくもな  
いがあえて捜す気もない。両親よりも乳母の  
梅に会いたかった。  
小倉に移ってから二十年ぶりに孫娘の結婚式  
出席のため福岡に帰った。娘夫婦は小笹の住  
宅街に立派な家を建てていた。結婚式が済ん  
で初めてその家に泊まった。あくる日義理の  
息子から新規事業の相談をされたが、自分の  
目の黒い内は絶対許さないと反対した。父親  
の失敗を見ている妙には許せない事だった。  
小倉に戻りまた一人の生活が始まった。小さ  
いながらも三人の従業員を抱えた販売店、い  
や今は北九州営業所となった店の責任者とし  
て忙しい日々を送っていた。  
妙が七十六歳の年、ひ孫の陽子が小倉の大学  
に入学したので居候することになった。  
妙は陽子が可愛くて仕方がなかった。食事や  
身の回りの世話をすることで生活に張りがで  
き、毎日が楽しくてしょうがなかった。

従業員からも「女将さん最近若返りましたね  
いい人でも出来たんですか。」とからかわれ  
る。目の中に入れても痛くないというのはこ  
ういう事だと思った。  
陽子は我がままな所もあるが、気性がさっぱ  
りとして思いやりのある心根のやさしい娘で  
ある。また好きな事は一生懸命にやる頑張り  
屋でもある。妙は長崎の桜花楼で一緒だった  
麻子を思い出した。どことなく二人は似てい  
る。  
そんなある日こんな出来事があった。  
「妙さん今日友達を連れて来るから小倉ホテ  
ルのいちごのショートケーキを十個買つと  
いてくれる。」そう言われて妙は友達をた  
くさん連れて来るのだと思った。部屋をきれ  
いに片付けてケーキと紅茶を用意して帰りを  
待った。午後三時過ぎに同級生の君子という  
清楚な女性を連れて帰って来た。妙に紹介し  
てから陽子の部屋に行きレコードをかけてか  
らおしゃべりをしている。一人なのに何でケ

「キを十個も頼んだのか不思議に思ったが、陽子の好物であるからと納得した。ケーキと紅茶を部屋に持っていくと陽子が妙なことを言う。「そうだ昨日ケーキをたくさん貰ったのよね、うち妙さんと二人暮らしでしょ、いくら好きでも一度に食べきれないし、君ちゃん荷物になるけど貰ってくれない。」妙は啞然とした。陽子の言ってる意味がよく分からない。「妙さん残りのケーキ包んどいてくれる、帰りに君ちゃんに持って帰って貰うから。」いつもはいつぺんに二三個ペロツと食べる大好物なのに・・・不審に思いながらも妙は残りのケーキを包んだ。君ちゃんが帰ってから陽子に訳を尋ねた。陽子は素直に頭をさげて話してくれた。君ちゃんが中学生の時お父さんが交通事故で亡くなった。お母さんが働きながら三人の子供を育てている。君子は長女で下に妹がいる。

大学に行けるような身分ではないのだけど、  
これからは女性も学歴が必要だと母が進学を  
勧めてくれた。優秀な君子は推薦と特別奨学  
金を受け、夜は居酒屋でアルバイトをしながら  
ら大学に通っている。それでも生活は大変ら  
しい。君子がアルバイトが休みの日、学校の  
帰りに陽子が奢るからと喫茶店に誘った。  
帰り際レジ横のショーケースに並べられたケ  
ーキを見ながら「早く勤めるようになって妹  
にケーキを買ってやりたいな。」とぽつんと  
つぶやいた。その言葉が陽子の頭に残ってい  
た。ある日、誕生日占いの話をしていて君子  
の妹の誕生日を知った。陽子は誕生日に妹さ  
んにケーキをプレゼントしようと思った。  
その日が今日だったのである。素直にケーキ  
をプレゼントすればいいのだが、君子に気を  
使わずに渡そうと考えて一芝居打ったので  
ある。それを聞いて妙は陽子の優しさに涙が  
こぼれた。

それから半年して妙が恐れていた時が訪れた。

。

陽子の大学卒業である。妙は小倉に就職する  
ように勧めたが希望の会社がないと、福岡の  
テレビ局に就職して小笹の家に帰ってしまった。  
た。ふたたび寂しい一人暮らしが始まった。  
表面は素っ気無い陽子だが、初めての給料で  
携帯電話をプレゼントしてくれた。文字が大  
きく操作の簡単な老人向けの機種である。  
毎日仕事が終わると電話をくれた。陽子の優  
しい気遣いに涙がこぼれた。たまに仕事で小  
倉に来た時は必ず家に泊まってくれた。  
陽子が福岡に帰って二年が過ぎたある日、孫  
つまり陽子の母親から陽子が来てないかと電  
話が入った。昨日家に帰って来なかったのだ  
今朝会社に電話したが入社してないという。  
友達にも電話してみたが誰も知らない。無断  
外泊など一度も無かったので心配していると  
いう。妙は居てもたつてもいられなくて小倉  
の心当たりを探したが見つからない。警察に  
搜索願も出した。もう一ヶ月になるが未だに  
手がかりさええない。大学時代歴史、特に幕末

時代に興味のあった陽子はよく下関に出掛け  
ていたので、手がかりでも掴めないかと今朝  
妙は下関にやって来たのである。  
そこまで一気に話した妙はお冷を一口飲んで  
から煙草に火をつけた。  
「今朝下関に来たんじゃけど、どこをどう探  
したらええか見当もつかんわ。今からどう  
したもんか。」  
「そうですね、そうだと陽子さんの写真持って  
ないんですか。写真があれば僕が店などで  
聞いてあげますけど。」  
「そうよね、拓海君ええ事言うな、写真持つ  
てるわ。」  
そう言うとバッグを探り始めた。中から小さ  
なビニールケースを出してファスナーを開け  
写真を三枚取り出した。  
「あったわ、大学の頃のやけど今もそんなに  
変わっとらんわ。」  
そう言ってテーブルの上に写真を並べた。  
写真を見た僕は凍り付いてしまった。

「拓海君、こら拓海なに固まっとるんね。」  
しばらく言葉が出なかった。写真に写っているのは麻子である。そんなはずはない、あの人は死んだ麻子さんの娘のはずだ。でも酔った時の話は何だ、妙さんの話とダブっている妙さんの孫の娘の陽子さんと麻子さんの娘が同一人物、いくら見直しても間違いない。僕の頭の中はパニック状態である。  
「本当にどうしたんね、陽子を知っとるん。」  
「はい知ってます。」  
「えっ、本当に知っとるんね。からかっとるんやないやろうね。」  
「本当です。でも名前が違うんです。今僕の事務所に居るはずです。」  
妙は目を見開き顔に赤みが差してきた。頭の中で話が絡み合いもつれ合っているが、とにかく妙と麻子を会わせてみれば何か分かるかもしれない。すぐに二人はレストランを出て事務所に向かった。  
事務所に着くと麻子はいなかった。がっかり

した妙は疑うような目で言った。  
「おらんやないね、からかったとね。」  
「とんでもない、困っているお年寄りをから  
かったりなんかしませんよ。ほら彼女が弾  
いていた三味線があります。」  
「三味線、陽子は三味線なんか弾けんよ。」  
「そうですか、でも写真は間違はなく麻子さ  
んです。」  
「麻ちゃんは歳も顔も全然ちがうわ。」  
「そうなんですが、妙さんの長崎の話とそっ  
くりな話を彼女から聞いたんです。」  
「そっくりな話って、下関に親戚も知り合い  
もおりやせんよ。」  
「僕の知ってる麻子さんが妙さんの話の麻子  
さんの娘だったら辻褃が合うんじゃないで  
すか。」  
「いや娘にしても歳が若すぎるわ。」  
「やっぱりそうなんですよね。」  
「とにかくその麻子さんに会ってみんことに  
は分からんわ。」



「それがどこに住んでいるか知らないんですよ、でもここには必ず来ます。」

それから昨日の夜の出来事を全部話した。妙さんも間違いなく自分と麻ちゃんのことだと納得した。しかし麻子と名乗る娘との関係が今ひとつ謎である。はたして彼女は何者なのか。いや待てよ、確か門司港のオルゴール館で女性が陽子、川上陽子と言っていた。「妙さん陽子さんの苗字は川上ですよね。」

「そう川上やけど。」

「やっぱりそうか。」

「どうしたとね、何か分かったとね。」

「いえね、ここに来る麻子さん、一度同級生と名乗る女性から川上陽子さんと呼ばれたんですよ。」

「えっどういうことね。」

「いえ、麻子さんは知らないと言っていました。たが、何か変ですよね。」

やはり麻子と名乗る女性は川上陽子さんに違いない、ならば何故麻子と名乗るのだろうか、

それに丸山麻子さんの事をあれほど詳しく知  
っているのだろうか。謎は増すばかりである  
とにかく彼女は絶対に来るので必ず会わせる  
約束をして妙は帰って行った。勿論自宅と携  
帯電話の番号をひかえて、陽子の写真も借り  
ておいた。

テーブルの上は綺麗に片付けてあった。僕は  
コーヒーを淹れ窓辺に腰掛けて今までの話を  
整理することにした。船のカウントをつけて  
いたノートに麻子と妙の生い立ちを綴ってい  
った。

塩原妙は小倉で生まれた、父親がやくざに  
騙され会社を乗っ取られ無一文になったあげ  
く、妙を長崎丸山の桜花楼に身売りした。妙  
は十五歳で夢松と名乗り娼妓になった。十八  
歳の時に菊蔵と桜花楼から足抜けして、福岡  
の姪浜で所帯を持った。二十歳で麻美を産み  
乾物の会社を設立した。三十九歳の時孫が産  
まれ、四十六歳で小倉に移り、五十九歳でひ  
孫の陽子が産まれた。陽子が小倉の大学に入

り四年間妙の家で過ごしたのち福岡のテレビ局に就職して福岡に帰って行った。それから二年後の今年、陽子が蒸発して一ヶ月になる。現在妙は八十二歳である。ざっとこんなところである。

一方、丸山麻子は田川で七人兄弟の六番目四女として産まれた。炭鉱で働く父親は落盤事故で怪我をしてから働かなくなった。貧しい家計を助けるため、小学校を卒業と同時に長崎丸山の桜花楼に十年年季で売られた。十六歳で豆貞と名乗り舞妓になり、十八歳で芸妓になった。二十八歳の時長崎に原子爆弾が落とされた。それから先がはつきりしない。推測すれば、いろいろあって下関に来て芸妓を始めた。市場で働く男と結婚して娘が出来たが離婚をした。阿弥陀寺町に家を建て、女手ひとつで娘を育てたが、高校を卒業してすぐに東京に嫁いで行った。芸妓をやめて三味線を教えながら生活していたが、七十代で入院してそのまま八十代で亡くなった。娘は家を

売り、拓海がその家を借りた。娘は離婚して下関に戻りこの家で俺と出会った。妙の方はほぼ完璧であるが、麻子の方は謎だらけである。拓海の出会った麻子は本当に妙の知っている麻子の娘だろうか、生い立ちをあれだけ詳しく知っているところを見れば関係はありそうだ。もうひとつの謎は陽子はどこに消えたのか、そして写真を見る限り同一人物である麻子と陽子の関係は・・。とにかく麻子に聞いてみるしかない。連絡先を聞いてないことを後悔したが麻子が来るのを待つしかない。毎日イライラしながら待っているが、いっこうに現れない。妙からも毎日電話がある。そうして一週間が過ぎた土曜日、近所のカフェにランチに出掛けた。事務所から五六軒先の小さなビルの三階にある女性に人気の店である。よく利用するので経営者夫婦と懇意である。カウンターに腰掛けて食後のエスプレッソを飲みながら陽子の写真を眺めていると、カウンターの中からマスターが

話しかけてきた。  
「拓海さん何を熱心に見ているんですか。」  
「ああ、尋ね人の写真やけど、マスター心当たりない。」  
そう言っつて写真を渡すと、しばらく眺めてからママを呼んだ。  
「ねえ、この娘、先月閉店まで居た娘やないかな。」  
「そうあの娘よ、一人で来てカクテルをかなり飲んで帰るとき足がふらついていた。」  
「間違いない、階段が危ないので僕が下まで送って行きました。垢抜けた綺麗な娘でした。」  
灯台元暗しである。こんな近くに手がかりがあるとは驚きである。  
「この娘どうかしたんですか。」  
「行方不明らしいんだ、その時の様子詳しく聞かせてよ。」  
マスターは思い出しながら細かく話してくれた。土曜日の夜九時前に一人で入って来て海

側のカウンターに座った。昼間は女性の一人客は多いが、夜は常連さんは別として珍しいそうだ。かなりのハイピッチでカクテルのお替りをするので、何か嫌な事でもあるのだろううと思った。十一時の閉店だが土曜日はどうしても遅くなるらしく、その日も最後の客、つまり陽子と思しき客が帰ったのは十二時半頃だった。足元がかなりふらついていたので階段が危ないと思い、一階まで手を添えて送ったそうだ。受け答えはちゃんとしており、近くのホテルに泊まってると言ったらしい。写真の女性に間違いないとアルバイトの娘も言う。おそらく陽子に違いない。しかしそれから足の取りが分からない。近くにはラブホテルを除いて三軒のホテルと旅館が一軒あるのでそこに当たってみることにした。僕はカフェを出てホテルに向かった。四軒とも従業員に知り合いがいたので調べはスムーズにいった。

どこの宿泊名簿にも陽子の名前はなかった。

がっかりして重い足取りで事務所に戻る途中、  
二軒隣のビルの前に麻子が立っていた。  
「麻子さんどうしたんですか黙って帰ってしま  
まって、心配しましたよ。」  
「だって起きたら拓海君居ないんだもの、そ  
れよりこれ見てよ、落ちていたの。」  
手のひらに何かを握っている。  
「何ですか、えっ、鳥の雛じゃないですか。」  
「そうよここに落ちていたの。」  
麻子が指差すコンクリートの床には鳥の糞が  
散らばっている。見上げると軒下にツバメの  
巣がある。  
「あの巣から落ちたんですね。」  
「そうらしいの怪我はしてないみたいだけど  
心配して親鳥が周りを飛び回っているの。」  
「でも巣は随分高いですね。ちよっと待って  
て下さい、脚立持ってきて来ます。」  
僕は急いで事務所に戻り裏に置いてある脚  
立を取ってきた。  
「届くかなあ、麻子さんしっかり押さえてて

下さいね。」

雛を胸ポケットに入れて脚立の一番上まで登り、ゆっくりと立ち上がった。なんとか雛を巢に戻す事が出来た。

「良かった、拓海君ありがとう。」

「いいえ、それより随分来なかつたですね。

心配してました。」

「拓海君こそどこ行ってたの、目が覚めたら居ないし、お昼過ぎまで待ってたのよ。」

「それは済みません、散歩に出たら面白い人に会って話し込んでしまいました。」

「誰よ、面白い人って。」

「きつと麻子さんビックリしますよ。事務所に戻りましょう。」

事務所に戻り先週の妙との話を詳細漏らさず話した。麻子の顔色が見る間に青ざめた。驚きとも恐怖ともつかぬ顔である。

麻子は「ふっ」と小さくため息をついた。

「すごい偶然ね、いえ奇跡かもしれない。」

「何が奇跡なんですか。」



「こうなったらすべて正直に話すから、拓海君驚かないでね。」

「もうすでに驚いてますよ。」

「もつと驚く事、いえ信じて貰えないかもしれない、逃げないでね。」

「逃げたりなんかしませんよ。」

「まだ外が明るいいわね。」

そう言うとき麻子は静かに話し始めた。それは本当に信じられない話だった。

「実は私、幽霊なの。」

「えっ、冗談でしょ、ちゃんと足があるじゃないですか。」

「足が無いのは作り話の幽霊よ。私は本物の幽霊。だから驚かないでって言ったのよ。」

「わっ、分かりました驚きません、でも明るい内で良かった。」

「拓海君の予測通りこの家に住んでたのは、丸山麻子で、桜花楼で妙ちゃんと一緒にだった麻子よ。」

麻子は遡って詳しく話し始めた。

グラバー邸近くの洋館の前で犬のカピタンに再会した時、長崎に原子爆弾が投下された爆心地から6キロメートル離れていたのと高い丘で遮られていたのが幸いして、爆風による被害を受けなかった。桜花楼に近づくにしたがって事の重大さを認識させられた。粉々に吹き飛ばされた建物、お腹が膨れ上がって横たわる馬や牛、皮膚が溶けてケロイド状になってさまよう老婆、黒焦げになって転がっている死体、まるで地獄絵図を見ているようであった。桜花楼は窓ガラスが割れただけで建物は無事だった。すぐに田川に帰りたいが、鉄道は被災者運搬のため満杯だった。それでも三日後に何とか乗車出来て田川へ帰って行った。麻子が帰って二年後に母が結核で亡くなった。麻子は再び親戚の原田の紹介で、下関の稲荷横丁にある置屋に世話になり芸妓に戻った。三十二歳の時、魚市場に勤める男と所帯を持ち次ぎの年に娘が産まれた。始めはやさしか

ったが酒を飲むと暴力を振るう夫に嫌気が差し五年で別れた。四十二歳の時、阿弥陀寺町に小さな家を建てた。四十八歳で芸妓を辞め、明け方は魚市場で働き昼間は自宅で三味線を教えて娘を育てた。娘は高校を卒業して地元、の商社に就職した。一年して上司の営業マンと結婚したが転勤で東京へ行ってしまった。寂しい一人暮らしを送っていたが七十三歳で被爆のせいか白血病になり、入院して五年目に病院で死んだ。七十八歳だった。

「死んだらあの世から迎えが来たの。火葬場で焼かれて霊だけになったんだけど、どうしても一度家に帰りたくて無理やりお願いして、一晩の約束で家に帰ったの。でも一晩家で過ごしたら帰りたくなくなって迎えの使者との約束をすっぽかしてしまった。それから今日まで四年が経った訳なのよ。せっかく楽しく暮らしていたのに君がやって来て家具を全部捨てちゃうし頭にきてたのよ。」

「それは済みません。でも迎えが四年間の間  
来なかったんですか。」

「それは来たわよ、その都度理由をつけて伸  
ばしてきたの。最近が高齢化社会で死ぬ人  
も増え迎えも忙しいらしいの。初めの頃は  
三日おきに來てたけど、だんだん間隔が開  
いてきて最近は一ヶ月に一回ぐらいよ。」

「何か信じられないな。」

「別に信じて貰わなくても結構よ。」

「拗ねないでくださいよ。信じますが、何  
故霊じゃなく身体があるんですか。」

「そこが肝心なところなのよ。一ヶ月前の土曜  
日の夜、月明かりが素敵な夜だったので海  
の側のボードウォークに出ていたの、若い  
男の子も何人かいたわ。そろそろ戻ろうと  
思ってたところに、足をふらつかせた女の  
娘がやって来たの。かなり酔ってるなと見  
ていたら、手すりをまたいで腰掛けたの、  
危ないと思っただ途端お尻がすべって海にま  
っ逆さまよ。急いで私も海に飛び込んだけ

ど悲しいかな霊でしよどうにも出来ないの、  
その娘はどんどん沈んで行くけど只側で見  
るだけ、そしたら彼女の身体から霊が抜け  
始めたのよ、これはまずいと思ひ急いで身  
体の中に入り込んで霊を引き戻そうとした  
けどだめだった。彼女の霊はどこかに行っ  
てしまった。」

「何か冒険活劇を聞いてるみたい。」

「茶化すんじゃないの、こっちは必死だった  
んだから。気が付いたら私の霊がその娘の  
身体から出れなくなったの。必死でもがい  
たけどだめだった。そのうち身体が浮いて  
きたなと思ったたら男性に抱きかかえられて、  
二三人の男性によって陸に上げられたの。  
近くにいた男の子達が飛び込んで助けてく  
れたのね。すぐに一人が人工呼吸をして息  
を吹き返したのよ。男の子達は病院へ連れ  
て行ってくれると言うけど、家がすぐそこ  
だから大丈夫だからとしっかりお礼を言っ  
てこの家に帰って来たの。実は家の合鍵を、

生きてた時クーラーの室外機の裏に隠しておいて良かった。身体があると霊と違って入れないもの。」

「じゃあそれからずっとこの家に居たんですか。」

「そうよ、だから拓海君がここに来た時からあなたの事ずっと見ていたわ。」

「じゃあ生きてるんじゃないですか霊が違うだけで、幽霊じゃないですよ。」

「そういえばそうね。でもこの身体が妙ちゃんひ孫だなんて不思議な偶然ね。」

「そうだ妙さんに連絡しなければいけない、妙さんに会ってくれますよね。」

「それは構わないし、私も会いたいけど、妙ちゃんの気持ちを考えると複雑よね。」

「そうですね、陽子さんであって陽子さんではないんですから複雑ですよね。」

それから僕はすぐ妙に連絡をした。大喜びですぐに来ると言って電話を切った。小倉からだと一時間もあれば着くだろう。

麻子が紅茶を淹れてくれたので、二人で窓辺のテーブルに腰掛けた。これからの事を考えると複雑だった。二人は一言も発せず海を眺めて紅茶を飲んだ。

表にタクシーが止まった、妙が相変わらず派手な格好で降りて来た。電話を切ってから一時間も経ってない。息を切らして入って来て麻子を見ると本当に驚いた顔をしたが何も言わずに抱きしめた。目には涙があふれている。麻子は困惑の表情でじっと抱かれていた。

麻子が崩れ落ちそうな妙の身体を抱えて椅子に座らせた。涙でアイシャドウが溶けて目の周りに隈が出来ている。

「良かった、生きてて本当に良かった。」

麻子を見つめてしみじみとつぶやいた。僕も麻子も複雑な気持ちだった。

意を決して拓海は麻子から聞いたすべてを話した。

聞き終わると妙は煙草を取り出して火を付けた。僕は急いで台所から灰皿を持って来てテ

ーブルの上に置いた。大きく吸い込んでいっ  
ばい煙を吐き出してから口を開いた。

「陽子の中身は麻ちゃんなんやね。久しぶり  
やね、でもこんな形で再会するなんて・・

・・・」

「そうやね、陽子さんを助けてあげられんで  
ごめんね。」

「あんたが謝ることはない、身体だけでも助  
けてもろてありがたいわ。」

「陽子さんの霊はどこに行ったんですかね。」  
ポツリとつぶやいた拓海の言葉に麻子が反応  
した。

「そうや、迎えの使者が言うとしたけど、身  
体が無くならん内は霊はあの世に行けんら  
しい。」

「えっそうなんですか、じゃあ陽子さんの霊  
はどこにいるんだろう。」

「思い出した、三日前迎えの使者と交信した  
時、確かもう一人女性の霊がこの辺におる  
って言うとした。」



「じゃあその霊が陽子さんかもしれないですね。」

「その可能性高いわね。見つければ私の霊と入れ替わるかもしれない。使者に聞いてみる。」

「聞いてみるって、連絡取れるんですか。」

「出来るんよ、使者と交信できる場所があるんよ。」

「そうなんですか、でも陽子さんの霊が見つかって入れ替わったら麻子さんの霊はどうなるんですか。」

「私の身体はとっくに焼かれとるから、あの世に行くだけよ。」

「そんな・・・」

「拓海君寂しいんね、私に惚たん・・・そうか私じゃのうて陽子さんかあ。」

「馬鹿なこと言わないで下さい。それより麻子さん言葉遣いが変わりましたね。」

「とにかく私出掛けてくる、妙ちゃん待っててね。」

「麻ちゃん恩にきるわ。」

麻子は交信できる場所に出掛けて行った。

「拓海君本当にありがとう、あんたに会わなかったら陽子見つかった。」

「いえ僕は何もしていません、偶然の奇跡が起こったんだと思います。陽子さんの霊、きっと見つかりますよ。」

そうは言ったが僕の胸の中は複雑な不安で溢れていた。それから二人は黙ったままで海峡を見つめていた。妙はしきりに煙草を吹かしている。

一時間も経っただろうか麻子が帰って来た。外はすっかり暗くなっている。二人の間に腰掛けた麻子の顔は微笑んでいる。二人は固唾を飲んで麻子の話を待っている。

「分かったわ陽子さんに間違いないわ。この辺を転々としていているらしい、身体が残っているうちは遠くへは行けんらしい。」

「霊は見えないんでしょ、どうやって探すんですか。」

「人間には見えんけど霊同士なら分かる。」	「じゃあ僕は探せないってことか。」	「大丈夫よ私が探すから。」	「でも麻子さんは身体があるからどこへも飛んで行けないでしょ。」	「そう歩いて探すしかないわね。」	「使者との交信みたいに霊同士で交信できないんですか。」	「お互いが交信出来る場所に居れば可能やけど、難しいわね。」	「その場所ってたくさんあるんですか。」	「この辺では十箇所くらいかしら、でも陽子さんの霊はまだ使者に会つたらんからそんなこと分かんと思うわ。自分がどういう状態かも分からんで怯えてると思う。」	「可愛そうな陽子、麻ちゃん早く助けてやって。」	「ええ、今から探しに行くわ。」	「でももう暗いですよ。」	「霊にそんなの関係ないわよ。」
----------------------	-------------------	---------------	---------------------------------	------------------	-----------------------------	-------------------------------	---------------------	---	-------------------------	-----------------	--------------	-----------------

「歩いて探すんなら僕も一緒に行きますよ。  
じっと待ってるの嫌だし。」  
「あたしも一緒に行くわ。」  
「妙さんはここで待っていて下さい、暗くて  
足元が悪いし、体力的に僕らと差があるか  
ら。」  
「そうよ妙ちゃん二人で行って来るから、行  
きたいやろうけど待っというて。」  
僕は奥の部屋から懐中電灯を出してきた。  
そうして二人はすぐに夜の町へ飛び出した。  
「まずどこへ行きますか。」  
「そうね立石神社へ行ってみようか。」  
「そこって、この先の道路の側に石段のある  
所ですか。」  
「そうよ拓海君知っとるの。」  
「ええ、妙さんと会った所です。」  
「そうなん、じゃあ行こうか。」  
「麻子さんなんか年寄りくさいしゃべり方で  
すね。」  
「そんなんいうても本当の年寄りやから、今

までは若い娘を演じとったんやから。」  
「まあそうでしょうけど・・・」  
「そんなことより早く行こう。」  
立石神社は夜来てみると灯りがひとつもなく  
真っ暗闇である。懐中電灯が早速役立った。  
夜の急な石段は若い二人でも楽ではない。  
何とか登りきって祠を照らしてみたが何の異  
常もない。二つの祠を隅々まで照らしている  
と麻子に叱られた。  
「拓海君いくらライトを照らしたって見える  
ものじゃないのよ。」  
渋々ライトを切り振り返ると眼前にライトア  
ップされた関門橋が浮かび上がった。昼間見  
た時よりもずっとすばらしい眺めである。僕  
はしばし見とれていた。  
「ここにはおらんわ、次に行きましょう。」  
そう言うと麻子はさっさと石段を降りて行っ  
た。僕はあわててライトをつけて後を追った。  
次にちよつと戻った所にある蛭子神社に行っ  
た。海峡沿いの国道に二十〜三十軒の民家が

海との境界線の様に並んでいる。民家の中ほ  
どにある路地を入ると赤い欄干の丸みを帯び  
たコンクリート製の橋が架かっている。その  
左右が船だまりになっている。橋を渡った左  
側に鳥居と小さな祠がある。漁師達が大漁と  
船の安全を祈願して建造したものだろう。  
麻子は祠の前で頭を垂れてじっとしている。  
僕は始めての場所なのでキョロキョロとせわ  
しなく辺りを見回した。  
「ここにもおらんわ。」  
「そうか、次どこ行きます。」  
「そうね遅いからもう一箇所だけ行こうか。」  
麻子は橋を戻って行った。あまりの速さに拓  
海はついて行くのがやっとだった。よく知っ  
ている赤間神宮の鳥居の前に着いた時には息  
が上がっていた。立石神社と違ってライトア  
ップされた朱色の水天門はまるで竜宮城のよ  
うである。門を抜けた広場の先の石段を登る  
と本殿に出る。左側にある社務所と本殿の間  
をいくと耳なし芳一の木造を奉った芳一堂が

ある。麻子の様子ではここにも陽子の霊はいないようだ。続いて麻子は芳一堂の奥にある平家一門の墓に向かった。そこには七つの石の墓が並び、その奥には小さな石を積んだ墓が無数に並んでいる。八歳の安徳帝が壇ノ浦に入水したのが1185年だから八百年以上の時が流れているのだが今もって生々しい無気味さが漂っている。思わず身震いした。

「ここにもおらんね。」

沈んだ声で麻子がつぶやいた。

「ここまで来たからもう一箇所だけ行こうかね。」

僕の事務所を通り過ぎて、亀山神宮に向かった。りっぱな石の鳥居がライトアップされて威風堂々とそびえている。その下にある石段は今日一番の長さである。僕はよろめきながらも登り切った。

「ここは広いから私一人で見てくる。拓海君はここで待って。」

その言葉は息絶え絶えの僕にはありがたかつた。石段を登り切った左側に大きな河豚の像がある。ライトを照らしてみると日本一大きな河豚の像と書いてある。その眼下に広がる海峡の夜景を眺めていた拓海は、何かの気配を感じて振り向いた。広場の真ん中に大きな木がそびえている。その根元に気配を感じる。恐る恐る近づいて行った。カサカサという音に身構えた。音のする辺りにライトを当てる。と野良猫がうずくまっていた。ほっとして木の前の解説板にライトを当てると「お亀銀杏」と書いてある。五百年前神社の前の海を埋め立てる時、工事の無事を祈願してお亀という名の女性が人柱となり海底に沈んだ。その功績を称えて銀杏を植えたと記されている。麻子と妙の二人もそうだが僕は女性のたくましさをつくづく感じた。二十分ほどで麻子は戻って来た。「ここにもおらんかったわ、どこに行っとらんやろうね。でも近くにはおるはずよ。」



今夜はこれで引き上げることにした。  
事務所に戻った拓海は妙の不安一杯の眼差しに胸が痛んだ。  
「妙ちゃんごめんね、見つからなかった。でも必ずこの近くにおるはずやから心配せんで、明日は必ず見つけるから。」  
「私は大丈夫よ、信じとるから、本当に二人共遅くまでありがとう。」  
そう言って妙は涙ぐんだ。しばらくの沈黙が流れた。  
「めそめそしても始まらんわ、二人ともお腹空いたやろ、拓海君近くでおいしい店知らんね。」  
「はあ知ってますが、ちよつと値段も高級ですよ。」  
「男のくせに何小まいこと言うとるの、心配せんでよか、私の奢りたい。」  
早速三人は食事に出掛けた。商店街近くの高級そうな寿司屋だった。  
食事が済んだ時は十一時を過ぎていた。

「妙さん今夜どうします。事務所でよければ泊まりませんか。」

「私は近くのホテルに泊まるわ、麻ちゃんも一緒に泊まろうや。」

「そうやね積もる話もあるしそうしよう。」

僕は二人をホテルまで送り届け事務所に戻った。

ソファーに横になったがなかなか眠れない。陽子の霊が見つかったら、二つの霊は入れ替わって麻子の霊は天国に上って行く。

何か分からない感情が拓海の胸を締め付ける。空が白み始めた頃ようやく眠りについた。

三時間も眠っただろうか、汽笛の音で目が覚めた。コーヒーを淹れているとドアの開く音がして早々と二人がやって来た。

「いい香りやね、私達にもコーヒーお願いします。」

時計を見ると八時を少し回っていた。

「お二人とも早いですね、来るのは昼ごろだろうと思ってました。」

「今日は陽子に会えるかもしれないと思った  
らいつまでも寝ていられないわよ。それに  
年寄りには朝が早いのだよ。拓海君こそ早起き  
だわね。」

「何か気が高ぶって熟睡出来ませんでした。」  
三人は窓際のテーブルに腰掛けて、コーヒー  
を飲みながら今日の搜索の打ち合わせをした。  
コーヒーを飲み終えるとすぐに出発した。  
初めにすぐ近くの日清講和記念館に向かった。  
清国の李鴻章と日本の伊藤博文を中心に両国  
代表十一名が1895年におこなった講和会  
議の舞台である。館内の真ん中にテーブルと  
椅子が並べられて会議の様子が再現されてい  
る。  
ここにも陽子の霊は居なかった。  
次に記念館の上にある割烹春帆楼の横にある  
李鴻章道と名づけられた高台の小道を通って  
藤原義江記念館に向かった。小道の突き当た  
りの石段の入り口に藤原義江記念館と書かれ  
た小さな手書きの看板がかかっている。

看板の矢印は石段の上を指している。僕は一度訪れたことがある。

「この先は狭くて急な階段と坂が続きますから妙さんはここで待っていて下さい。」

「何言ってるの一緒に行くわよ。私のペースで登るから二人は先に行つてちょうだい。」

「じゃあ先に行きますから、無理しないで下さいよ。」

狭い階段と急な坂が曲がりくねった連続は流石に僕も息が切れた。二十五歳の身体の麻子は疲れを見せない。

頂上に着くと深い芝生の原っぱで、まるで緑の絨毯を敷き詰めたようだ。広場には一本のねむの木が風を受けピンクの花をつけた枝を揺らしていた。記念館は何の変哲も無い三階建ての白い洋館である。入り口のドアは鍵がかかっている。そういえば途中の案内板に閉館中と書いてあった。

「麻子さん中に入れませんがどうしますか。」

「大丈夫ここでは霊同士の交信が出来るから

でもここにもおらんわね。」

戻ろうとしたところに妙が到着した。

「妙さん頑張りましたね、意外と早かったじゃないですか。」

「やっぱり拓海君の言う通りこの歳じゃちよっと厳しい坂だわね。」

余程きつかったのだろう、素直に僕の忠告を認めた。

「妙さんが来たんなら少し休憩してから次に行こうかね。」

三人は深い芝生の上に足を投げ出して座り込んだ。暫くして麻子が立ち上がり、ねむの木の下に行くとうつぶむいたままじっとしてる。二人は意味が分からずポカンと見つめていた。麻子はそのまま固まったように動かない。五分ほど経って顔を上げると小走りで戻って来た。

「今使者と交信したんよ、喜んで、陽子さん  
の霊に会える。死界の使者、私を早くあの  
世へ連れて行きたいものやから必死で陽子

さんの霊と交信したらしいの、先ほど交信出来たそうよ。」

「それでどこにおるの。」

「妙ちゃん心配せんで時間ははつきりせんけど、拓海君の事務所に来るから。」

「それは良かった、じゃあ早く事務所に戻りましょう。」

三人は急いで事務所に引き返した。着いてすぐ時計を見ると正午を過ぎていた。

「朝から歩き回ったんでお腹空きましたね。」

二人は素直に頷いた。疲れたのだろう窓辺の椅子に腰掛けてグツタリしている。

「僕自転車でお弁当買ってきます。」

近くのスーパーでかなりボリュームのある幕の内弁当を買って来たが二人とも残さずに平らげた。二人は食後のコーヒーを飲みながらそれぞれの人生を話している。

僕は食欲がなかった。弁当を半分食べるのがやっとだった。胸を圧迫されるような息苦しさである。睡眠不足と搜索の疲れが出たのか

もしれない。ソファーに横になつたが異常な  
神経の高ぶりで目が冴えて眠れない。  
起き上がって奥の部屋へ行きCDデッキのス  
イッチを入れた。  
「♪嫌んなつたくもうだめさく何もいいこと  
ありやしねえ何とかしてくれ神様仏様♪」  
けだるいブルースが流れてきた。かすれた歌  
声が胸に突き刺さる。  
「拓海君何聴いとるの、陰気な曲やねえ。」  
麻子がやって来た。  
「ブルースですよ。」  
「具合でも悪いん、お弁当も残してから、元  
気がないわねえ。」  
「あまり寝てないんで睡眠不足なんです。」  
「じゃあ昼寝でもせんね、子守唄歌ってあげ  
るけえ。」  
「結構ですよ、ガキじゃあるまいし。」  
「冗談よ、拓海君すぐムキになるんやから、  
本当に子供みたい。もつと明るい曲かけて  
よ。」

「それじゃあお二人にぴったりの懐かしいのをかけてあげましょう。」  
そう言ってCDを掛け替えた。  
陽気なドドンパのリズムが流れてきた。  
「笠置シヅ子ね、なつかしいわ。」  
「昔を思い出すねえ。」  
音楽に惹かれて妙もやって来た。三人は奥の部屋の丸テーブルを囲んで音楽に聴きいつている。突然スピーカーから雑音が流れた。拓海はCDの傷のせいだと思ったが、麻子の顔色が変わった。  
「来たわ、陽子さんの霊が来たわ。」  
僕と妙は驚いて辺りを見回した。もちろん何も見えない。  
「今から話をするから二人は隣の部屋で待つ」といて。」  
二人は部屋を出て窓辺の椅子に腰掛けた。  
麻子は椅子に座ったまま目を瞑りうな垂れた。  
藤原義江記念会館前の木の下で使者と交信した時の様に身動きひとつしない。



僕と妙も緊張のあまり動けないでいる。昼間なのに事務所全体に無気味な妖気が漂っている。緊張した時間が流れた。暫くして麻子が顔を上げて二人を手招きした。二人は恐る恐る奥の部屋に行った。二人が椅子に腰掛けると麻子が口を開いた。「話は済んだわ、陽子さん自分がどうなったのかよく分からなかったみたい。普通に死んだのならあの世から迎える使者が来て、説明を受けた後あの世へのぼって行くんやけど、陽子さんの場合は私の霊が入ってしまつて身体が生きているものやから迎える使者が来なくて、自分の状況が分からんまま彷徨っていたみたい。」

「何で陽子は下関まで来て酔っ払ったの。」

「その事も聞いたけど、会社で上司と仕事のやり方で揉めたらしく、ムシヤクシヤした陽子さんは次の日が休みだったんで下関にいる友達の君子さんに会いに来たそうよ。」

突然現れて君子さんを驚かせるつもりだった

たけど、生憎君子さん出張で会えなかったらしいの。それで余計にムシヤクシヤが倍増してカクテルを飲み過ぎたらしい。」

「陽子の霊はまだおるの。」

「安心して妙ちゃんの頭の上に浮かんどるか。ら。」

「それでこれからどうなるんですか。」

妙の頭上に視線を泳がせながら拓海が心配顔で聞いた。

「陽子さんの霊と私が入れ替わるわ。だけど使者の手助けがないと出来ないの、ここに来てくれるように交信してくるわ。」

「そう言い残して麻子は出かけて行った。待っている二人は陽子の霊がいると思うと変に緊張して落ち着かなかった。」

一時間ちよつとで麻子はコンビニの袋を抱えて帰って来た。

「麻子さん買い物に行ってたんですか。」

僕が怪訝そうな顔で聞くと、麻子は笑いながら答えた。

「ちゃんと交信して来たわ。今日は忙しく明日も夕方まで予定が入っているので、時間は分からないけど夜には来れるそうよ。や」と私を連れて行けるって喜んでたわ。」

「明日の夜ですか・・・」

僕は沈んだ声でつぶやいた。

「最後の夜だから送別会しようと思って、自分で言い出すなんて厚かましいわね。」

「そんなことないよ、麻ちゃん本当にありがとう。」

そう言って妙は涙ぐんだ。僕はうつむいたまま黙っていた。

「何ね二人とも葬式みたいに、陽子さんが戻って来るんだから目出度いことなんよ。」

そう言うと麻子は買ってきた物をテーブルの上に並べた。海峡を通る船のカウントをした日と同じように缶ビールと泡盛、それにチーズやおかき等のつまみ類、おにぎりまで買っていた。それらの品で一杯になったテーブルを見回して妙が言った。

「そうね、麻ちゃんの言うとおりにメソメソしても始まらないわ、今夜はパーッとやりましよう。」

「陽子さんごめんね、今晚あなたの身体酔っぱらっちゃうけど許してね。」

妙の頭上を見つめて麻子が言った。

「麻ちゃん大丈夫よ、陽子もお酒強い方だから、そうよね陽子。」

自分の頭上に向かって妙も言った。僕は相変わらずうつむいていた。

「拓海君気持ち分かるけど、メソメソしたら麻ちゃんだって辛くなるわ。パーッと明るく送ってあげようや。あたしたち大正生まれは激動の時代を逆境にめげず逞しく生きて来たんやから、メソメソするのは大嫌い、そうよね麻ちゃん。」

「その通り、拓海今夜は大いに飲もう。」

顔を上げて僕は妙の膝に突っ伏して泣き出した。声を上げて泣く僕を優しく抱きかかえる妙の目にも涙が溢れている。

ただ麻子だけが口を開けて啞然としている。  
僕の嗚咽はしばらく続いたが、泣き疲れて沈  
黙の時間が流れた。麻子と妙は黙って見つめて  
いる。僕は突然起き上がるとしゃべり出した。  
「冗談ですよ、ジョークジョーク、二人にさ  
んざんやられっぱなしだったから、仕返し  
に泣きまねをしただけですよ。」  
泣きまねだとは言ったが顔が涙でグシャグシ  
ヤに濡れている。  
「さあパーツとやりましょう。妙さん何やつ  
てるんですか早く乾杯しましょ。」  
あっけに取られていた妙はあわてて缶ビール  
を配った。こうして今までは打って変わった  
賑やかさで送別会が始まった。酔うに連れ  
て麻子が三味線を弾き、妙が歌い、二人で踊  
り僕もギターを出してきて歌った。夜中にお  
酒が切れてしまったが、ふらつく足で僕はコ  
ンビニまで買出しに行った。全員が酔いつぶ  
れた時にはもう空が白み始めていた。  
翌日三人が目覚めたのは昼の二時半だった。

目を覚ましてすぐに妙は聞いた。

「麻ちゃん陽子はおる。」

「心配せんで、あんたの頭の上にちゃんとおるから、昨日の騒ぎにちよつと驚いとるけどね。」

「ちよつと羽目を外し過ぎたわ。あんなに飲んだんは何年振りやろ。」

「私だって何十年振りやわ。でも良い思い出が出来たわ。」

「泣きべそ小僧お目覚めかい。」  
目を腫らして起きてきた僕に妙がおどけて言った。

「・・・」

あんなにはしゃいでいたのにまた宴会前の僕に戻ってしまった。

麻子が手早く朝食兼昼食を作ってくれた。

鰯の開きに大根ときゅうりの糠漬け、それに味噌汁、昨日お酒と一緒に買っていたそう

だ。久しぶりの麻子の手料理は嬉しかったが最後だと思つたと笑顔にはなれない。

食事が済むと三人は陽子の霊を伴って散歩に出掛けた。海沿いを関門トンネルの人道口にあるみもすそ川公園まで歩いた。黒船を砲撃した砲台のレプリカが海峡に向けて設置してある公園で行われている紙芝居をみんなで鑑賞した。源平合戦の物語である。

その後公園の向かい側の割烹旅館の中にあるカフェで抹茶を飲んだ。ふたたび海の側の歩道を帰って行った。事務所に着いたのはちょうど六時だった。

迎えの使者が来た時留守だといけないので、妙が夕食は出前をとろうと言ったが、陽子の霊が留守番すると言うので近くのカフェに行くことにした。例の三階のカフェに着くと三人は真ん中の大きな丸テーブルに座った。客は海側のカウンターに女性のペアが二組だけで夕方にしては空いていた。注文を取りに来たママが麻子を見て「見つかったんですね。」と僕の耳元で囁いた。

最後の晚餐である。三人は赤ワインで乾杯し

た。ほとんど言葉も無く食事を済まして事務所に戻ったが使者はまだ来てなかった。僕はほっと胸を撫で下ろした。麻子が紅茶を淹れてくれた。窓辺のテーブルで一緒に飲むと言ったが、妙は気を利かせて奥の部屋で飲む。「陽子と一緒にね。」と言って奥に行ってしまった。暫くして笠置シヅ子の歌が流れて来た。僕と麻子は窓辺のテーブルに向かい合っていた。二人とも黙って紅茶を飲んでいる。僕は船のカウントをした時を思い出していた。静かな口調で麻子が話し出した。「拓海君短い間だったけどありがとう。とても楽しかった。小さい頃から私の側にはろくな男が居なかった。お父さんは仕事もせずにお酒飲んでばかりいたし、桜花楼でも酔っ払いか女性を品物としか見てない男ばかり、二十歳の時にやさしくて少し惹かれたお客さんがいたの、身請けして妻に迎えたいと言ってくれたけど、お座敷で会



うだけでしょ、本気には出来なかったし、買われるみたいで嫌だった。下関に来て結婚した人は無口だけど優しかった、一時はね。でも半年経った頃から本性を現したの、お酒を飲んだら暴力を振るうし女はつくろし・・男はまっぴらだと思った。それからは一人で娘を育て嫁に出し、その後もずっと一人だった。長崎の被爆が原因で白血病になって入院し、ああ私はこのまま死ぬんだなあって思った時すごく寂しくなったの。私の人生何だったのかなって、何か欠けているなって・・でもそれが何だか分からなくて、その答えを知りたくてあの世に行くのを渋ったのかもしれない・・・ちよつとしゃべり過ぎね。」

「そんなことないです。でもしゃべり方が戻った。」

「最後だからかっこつけさせてよ。そして偶然に陽子さんの身体に入っちゃって、拓海君に出会って、とっても楽しかった。」

すごく充実した日々だった。  
まだ私が霊のままの時、拓海君がこの家に  
来てすぐの時、近所の子供が足を怪我した  
野良猫の子を見つけて騒いでいた。ごみと  
埃にまみれて真っ黒な子猫はマンシヨンの  
貯水槽の下で震えていた。  
子供達が保護しようとするが、足を引きず  
りながら必死で逃げ回る。拓海君は手に引  
つかき傷をつけられながらも保護して事務  
所に連れ帰った。それはすごい匂いで部屋  
中に充満した。「シャーシャー」と威嚇す  
る子猫に優しく話しかけながら濡れタオル  
で拭いてやり、自宅からゲージと毛布を持  
って来て一生懸命世話してた。チーズやか  
まぼこを噛み砕いて与えたり、ミルクを人  
肌に温めてやったり、その姿を見て本当に  
感動した。でも一番君の優しさを知ったの  
は、足の傷を診てもらいに動物病院に連れ  
て行ったら、車に轢かれたようで足よりも  
内臓をやられているので時間の問題ですと

言われた。君は痛み止めの注射を打ってく  
れるよう頼み、事務所に連れて帰って付き  
つきりで世話をした。宇宙（そら）という  
名前をつけてずっと名前を呼んで話し掛け  
ていた。あんなに威嚇していたのに、宇宙  
の目が優しくなっていた。一睡もせず看  
病した明け方、宇宙は死んでしまった。  
君は名前を呼びながら大声で泣いた。私も  
涙が止まらなかつた・・・。  
そして昨日私のためにあんなに泣いてくれ  
た、すごく嬉しかった。その時分かったの  
私の人生で欠けていたものはこれだって、  
愛する喜び、愛される喜び・・何か少女  
っぽいわね。」  
「いえ、その通りです。僕は麻子さんを愛し  
ています。陽子さんの容姿に惹かれたのは  
違いありません。でも愛が深まっていったの  
は一諸にいた日々の結果です。容姿だけで  
こんなに愛は深まってないと思います。  
麻子さんの霊がああの世に行ってしまうと言

われた時、胸が締め付けられるように苦し  
くて仕方がありませんでした。陽子さんは  
残るんだからと自分に言い聞かせても楽に  
はなりませんでした。麻子さんを愛してい  
るとはつきり分かったんです。」  
「ありがとう、そう言ってもらって本当に嬉  
しい。生まれて来た甲斐があったわ。  
これでこの世に思い残すことなく旅立てま  
す。拓海君私の三味線貰ってくれる。」  
「はい喜んで頂きます。本気で愛した人の形  
見です。一生大事にします。僕が死ぬ時に  
はあの世に持って行きます。その時はまた  
弾いて下さい。約束ですよ。」  
そう言って僕は麻子の前で小指を立てた。  
麻子の小指がそれに絡んだ。奥の部屋から妙  
の嗚咽が聞こえて来た。悲し気な低い汽笛が  
海峡から流れて来た。  
それから間もなくして迎えの使者がやって来  
た。窓べりの部屋の真ん中に麻子を立てせて、  
使者は大きく手を掲げ呪文とお経とも分か

らない言葉を唱え始めた。  
開け放った窓から白く光る帯が龍の様にうねりながら入ってきて陽子の身体を包み込んだ。使者の声が悶えるように一段と大きくなった。陽子の頭の上から紫色に輝く煙のような気体が吹き上がる。その気体はやがて人がたに変化して宙に浮いている。使者の声が消え入る様に低くくなっていく。陽子の身体を包み込んでいた白く光る帯が再び窓の外へと伸びて行く。紫色の人がたが白い帯に導かれるように移動する。  
窓を出ると庭の中空に停止した。  
続いて室内にたたずむ陽子の頭上に赤く光る人がたが現れたと同時に陽子の身体に吸い込まれていった。  
沈黙の時間が流れた。  
僕と妙さんは奥の部屋で凍り付いた様に微動だにしない。  
「妙さん。」  
陽子の口から弱くも若い声が漏れた。

現状がよく理解できないという風にポカんとした妙は何度も目をこすり両手でほっぺたを叩いた。そして大きく見開いた目で陽子を凝視した。目から涙が溢れ出すと同時に陽子を抱きしめた。その様子を見届けるかのように中空に停止していた紫色に光る人がたが眩しい光を放ちながら上空へと昇って行く。僕は急いで庭に飛び出した。見上げる目から溢れる涙に紫の光が反射している。妙と陽子も庭に飛び出して来た。三人に見つめられながら麻子の霊がああ世へと昇って行く。短いながらも充足感に満たされた麻子との時間。その一コマ一コマがスライドショーの様に僕の脳裏にフラッシュバックされる。「ウォーッ。」僕の咆哮が夜空に響き渡った。同時に海峡で「ブウォーッ」と汽笛が哭いた。

2002年下関市阿弥陀寺町

生き返った陽子には霊になってから蘇るまでの記憶はまったく無かったが、妙さんを挟んでの僕との交流は続いた。三年後に僕と陽子は結婚した。阿弥陀寺町の家を改装して住んでいる。その一年後に妙が亡くなった。ある日陽子が庭で変わった形の黒い石を拾ったとはしゃいでいる。「拓海さん、この黒い石よく見ると仏様に見える。」「えない。小さな仏様よ。」僕はハツとした。麻子が大事にしていた石炭の仏様だ。胸が締め付けられるような痛みと懐かしい温もりで涙が溢れて来た。海に見える部屋に神棚を作って奉ってやると陽子はキャツキャツと笑って喜んだ。もうすぐ夏が来る。窓辺のテーブルに腰掛けた僕は海から吹く心地よい風に吹かれながらへたくそな三味線を爪弾いている。陽子は楓の木の下で二匹の子犬と遊んでいる。家の前を通りかかったおばさんが声を掛けて

来た。

「可愛い子犬やね、何ていう名前なの。」

陽子が大きな声でそれに答えた。

「この子が豆貞で、この子が夢松です。」

「変わった名前やね。」

「変な名前でしょ、主人がつけたんです。」

今日も暑くなりそうだ。

「ブオーツ、ブオーツ」

海峡で汽笛が鳴った。

T H E E N D